
[連載中]3R

冴尻あやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「連載中」3R

【Nコード】

N8646Z

【作者名】

冴風あやか

【あらすじ】

ある日突然現れた叔母に決められた同居生活。
否応なしに決められ、行ってみるけれど…
青春真っ只中の少年少女たちが描く学園生活。

誤字脱字等に関しては連載終了後に全面修正します。

恋愛色も混じっては来ますが、現段階ではまだメインというわけではありません。

登場人物はまだ増えます。

Act・1 『桜の時』

淡いピンクの花びらが宙を舞い踊る。

風の速度に合わせ、時に早く、時にゆるりと。

散って行くことが終わりを告げることを意味していても。

悪あがきもせずに、流れに身を任せる潔さ。

公園へと続く道。

道を示すように並べられた桜の街道。

初めて歩く場所なのに、何故か懐かしくさえ感じる。

見上げると、ピンクとも白とも取れる淡い不思議な空間。

その隙間から見える空は、青く澄んでた。

少しの眩しさに顔を顰め、少年は、また歩み始めた。

桜の並木道が終わると、そこは広い公園だった。

綺麗に整備された公園は、中心に勢い良く飛沫を上げる噴水を陣取って、そこを中心にして円形に作られていた。

どうやら目的地に無事着くことができたことに、少年は安堵する。そして、今度は目的の人物を探す。

「まだ来ていないかな…？」

辺りを見渡してみるが、それらしい人物はいなかった。

仕方なく、誰も据わっていない適当なベンチを探し、腰掛ける。

肩に掛けていたスポーツバックが重い物音を立て無造作に下ろされた。

身軽になったことで、自然と息が吐き出でる。

ジーンズのポケットに手を入れ、携帯電話を取り出し、何となく

時間を確認すると、間も無く一時半が来ることを告げていた。そのまま慣れた手つきでリダイヤル画面を呼び出して確認するが、先ほど電話してから15分も経っていなかった。ぼーっと周りを見渡していると、色んな物が視界に映り、色んな音が耳に流れてくる。

楽しそうに声を立てながら遊具の隙間を駆け回る子供の姿。それを見守りながらも談笑に花を咲かす母親たち。ベンチに腰掛けて楽しそうにしているカップル。

そんな人たちの姿が、のどかさを余計に引き立てていた。ふと、先ほどの電話を思い出す。

自分から掛けて置いておかしい話だが、初めて聞く声だった。

『——はい、葉月です』

駅から掛けた電話は、たった二回のコールで取られた。

あまりの早さに少し驚いてしまい、すぐに声が出なかった。

葉月と名乗ったのを聞いて、掛けた相手が間違いではないことは分かる。

女性の声だった。

落ち着いていて、凜とした澄んだ声。

先方に同じ年の女の子がいると聞いていたのを思い出したので、きつとそうなのだろう。

『…もしもし？』

何も云わない相手を不振に思ったのか、念を押して尋ね掛けられた。

『あ、はい…中込悠羅ですけど…』

間の抜けた返事だと思う。

けれど、元々電話の苦手な少年にはそれ以外にどう切り出せば良いのかすぐには分からなかった。

『…駅に御着きになれましたか？』

名前を出したことで気づいてくれたのか、相手は話を続けてきた。

ほっとする。

きつと、バックの賑やかな人の出す音やホームのアナウンスなどが電話を通して相手に届いているのであろう。

『はい、そうです…。すみません…予定より一時間早く着いてしまつて…』

『…分かりました。すぐにお迎えに上がりたいところなのですが、今すぐは無理のようなので…もしよろしければ、近くまでおいで頂けますか？』

『はい、大丈夫です…お願いします』

『では、まずそこをますつぐに出られます…』

説明してくれる道筋を周りを見て検討立てながら覚えようとする。『…です。後はそちらの公園でお待ちいただければすぐにお迎えに上がりますので。…よろしいでしょうか？』

『はい…お願いします』

用件を云い終え、こちらが理解したのを確認すると、お待ちしておりますと言う声を最後に、電話は終話された。

用件だけの電話と言うのは、こういうことをいうのだろう。

少し迷ったところもあったけれど、それでも15分くらいでここに辿り着けたので、まあ、初めての場所に来るにしては早かった方だと思ふことにする。

そんな事を考えながらぼーっとしていると、誰かがまた公園内に入ってきた。

同じ年くらいの女の子だった。

きよろきよろとしきりに辺りを見回して、誰かを探している様子。ぼーっとしていて忘れていたが、そういえば自分も人と待ち合わせをしていたのだ。

もしかしたらと思い、はっとして見てみると、どうやら相手もそれに気づいたようで、慌しく近寄ってきた。

目の前まで駆けてくると、軽く上がった息を落ち着けるように、

少し前屈みに胸を抑えながら尋ねてきた。

「あつ、あの…悠羅さん…ですか…？」

ベンチに座っているため、少女の顔の位置の方が高かったので、見上げる形になる。

「はい、そうですけど…？」

なんとなく腑に落ちないのは、先ほど電話した相手の声とは違っていたからだ。

電話だからだったのだろうか。

でも、自分の名前を呼んだし間違いはないようではあるが…

「よかったあ…会えて…！」

安心したように笑って体制を直す。

青いアンサンブルになった上着と、裾に刺繍の入ったデニムのスカートに紺の靴下。

足元のスニーカーの結び目が解け掛けていた。

よほど急いで来てくれたのだろうか。

「ごめんね、遅くなって…」

すまなそうに謝って来る少女。

「いえ、こっちが早く着すぎたから…すみません」

そういうと、少し嬉しそうにして自分を見てきた。

「迷わなかった？」

「はい…一本道のようなものでしたし…」

「そっか、よかったあ。わたし、ちょっと家にいなくてね、携帯に電話貰って飛んで来ちゃった」

「すみません…」

悪いことをしたと、素直に謝ると、首を振ってそんなことはないのだと云ってくれる。

「わたしが会うの楽しみにしてたから急いで来たんだよー？」

そう笑う目の前の少女に、自分も少し緊張が緩む。

そういえば、急いで連絡を貰ったと云っていたけれど…

先ほどの電話はこの少女の声ではないのだろうか。

じゃあ、誰が…？

そんなことを考えていると「じゃあ、行こっか？」と、荷物を持ち上げようとしながら声が掛かった。

どうやら、自分の荷物を持つとうとしてくれているらしい。

「いえ、自分で持ちますから…」
慌てて持ち直す。

「そう？疲れてそうだし、わたし持つよ？」

「いえ…悪いですから…」

そういうと、少し拗ねた様に窘められた。

「今日から一緒に住むんだから、遠慮しないのっ」
どう返していいか分からず、苦笑する。

ゆっくりと、喋りながらその公園を後にし、また、あの桜の下を通った。

名前を尋ねると、少女は、玲奈と名乗った。

そのとき少し寂しそうに笑ったのが気になったが、すぐに戻ったので何も云わずにおいた。

彼女は、間違いなく自分の叔母に当る人物の娘らしいので、従姉になる。

「ここから、家は五分くらいなの」

そっぴいながら嬉しそうに少し先を歩きながら、付いて来ていることを確認するように、たまに振り返る。

「桜、綺麗でしょー。ここは結構雪振るから桜前線は遅いほうなんだけどね、今年は早かったみたい」

「そっなんですか…」

同じように桜を見上げてみる。

そして、ふと視線を戻すと、玲奈は自分の方を見ていた。

「…？」

「…あつ、ごめんね」

玲奈は自分が見入っていた事に気づき慌てて目を逸らす。

「う、ううん…何かついてる…？」

「違う違う、そんなのじゃないよ」

「…？」

「ごめんね、ほら、悠…羅くんは覚えてないかもしれないけど、わたしは小さい頃何度か遊んだ記憶があるからね、随分変わったな！って思つて。でも、もう十年以上前だし、変わって当たり前なんだよね」

「会ったことあるの？」

「やっぱり…覚えてないんだ？」

寂しそうな笑い顔。

先ほどの名乗ったときのあの顔を思い出す。

「ごめん…」

「あ、謝ることじゃないよ。気にしないで。さ、家ももうすぐそこだから」

「う、うん…」

そう言つて誤魔化すように腕をぐいつと引いたかと思うと少し掛け出され、思わず体制を崩すが、何とか持ち直し付いていく。

曲がり角を曲がると、大きな家が見えて、そこで玲奈は止まった。洋館…と言えるかも知れない。一般住宅と言うよりも、洋館と言つたほうがしっくりとくる大きさだ。

「…ここ？」

気後れしながら尋ねると、嬉しそうに二つ返事が返ってくる。

「ほら、入って入って？」

引つ張られ、玄関に辿り着く。

開かれた玄関の中は、予想通り広かった。

玄関から長めの廊下や、いくつかの部屋の扉や階段が見える。

そして、何より驚いたのは、すぐ目の前にまるで自分たちを待つように立っていた人物の存在だ。

金髪碧眼。まるでフランス人形のような女性。

「お帰りなさいませ」

軽く頭を下げて出迎えるその人は、先ほど電話に出てくれた人と同じ声をしていた。

より鮮明な、はっきりとした声。

「ただいま、ユウナさん。悠羅くん連れて来たよ」

そう言われて、ユウナと呼ばれた人物は、自分の方に視線を向けてきた。

瞬間、その青い瞳と目があう。

「ユウナさんはね、うちのメイドさんなんだよ」

横で玲奈に説明された。

このご時世にと思うかもしれないが、実際の屋敷を見た後だから、メイドの一人や二人いてもおかしくはないと納得する。

「えと、初めまして…今日からお世話になります」

「……初めまして。ユウナと申します。悠羅様」

名前を様付けで呼ばれたことのなかった悠羅はくすぐったさを覚える。

「あの…悠羅でいいです…よ…」

「いえ、私はメイドですから」

はつきりと引かれた一線をそこに感じた。

「ユウナさん、強情だから…」

苦笑交じりに玲奈が悠羅に声を掛ける。

「…」

無表情な彼女からは、感情が読み取れない。

怒っているのだろうか…？

「ほら、ユウナさん、笑って笑って。ユウナさんに睨まれて、悠羅くんびっくりしてるよ？」

くすくす笑いながらそう玲奈がそう諭すと、ユウナが少し顔を赤

らめた。

「に、睨んでなんかいません…っ！」

不機嫌なのではなく、感情を出すのが苦手なのだ。

それに気づくと、安心した。「ユウナさんも、悠羅くんに会えるの楽しみにしてたんだよ、ね？」

わざと玲奈がそういうと、ユウナの顔が益々赤くなった。

「わ、私はメイドとして…」

「はいはい、照れないの」

「玲奈様っ！」

完全に玲奈のペースで遊ばれているユウナを見て、悠羅は笑ってしまう。

「ほら、悠羅くん笑ってるよ？」

「……」

笑い顔の玲奈にそう言われ、まだ赤い顔で少しむうつとして自分を見てくるユウナ。

だが、先ほどとは違い、それが可愛くさえ見える。

「立ち話も何だし上がるうー」

玲奈はそう言っ先きに靴を脱いで上がると、スリッパを履いた。

「さ、悠羅くんも」

どうぞ、と促され「あ、お邪魔します…」というと、こらっと怒られた。

「ここは、今日から悠羅くんのお家なの。家に帰ったらまず『ただいま』でしょ？」

「え…」

「ほら」

妙に恥ずかしさを感じるが、二人の目に負けて素直に口にする。

「ただいま…？」

そんな様子に満足したのか、玲奈とユウナが顔を合わせ笑い合ってから答える。

「おかえりなさい、悠羅くん」

「おかえりなさいませ、悠羅様」

Act・1 『桜の時』（後書き）

* Character

- A 中込悠羅（15）：主人公、高1。玲奈の従弟。クラスは1

- A 葉月玲奈（15）：悠羅の従姉。同居先の住人。クラスは1

ユウナ（??）：葉月家のメイドさん。謎の多いひと。

堀江紗枝（15）：玲奈の小学校時代からの友達。クラスは

1 - A

- A 荻原歩美（15）：紗枝の中学時代からの友達。クラスは1

河口隆志（15）：悠羅の押し掛け友達。1 - Bで隣のクラス。
ス。

Act・2 『嵐のような人』

「…悠羅様。悠羅様」

遠くから声がする。

重い瞼を開くと、そこには青い瞳があつた。

「…！？」

あまりの驚きに、思考が一気に覚醒する。

同時に跳ね起きた。

「ユ、ユウナさん…？」

「おはようございます。悠羅様」

驚いている悠羅とは対照的に、落ち着いるその声の主は、淡々と朝の挨拶から始めた。

「おはよう…って何でここに…」

「それは、悠羅様。そろそろ悠羅様を起こすよう、玲奈様が言われたからです」

「そ、そう…」

「勝手に入ってしまい申し訳ありません。何度も外から声を掛けさせて頂いたのですが、一向にお返事がなかったのです…」

流石に勝手に部屋に入つたのはまずかったと思つたのか、すまなそうに謝る。

「う、ううん、いいよ…ありがとうございます…」

時計を見た。

春休みも終わり、これから三年間通う高校の入学式が今日ある。

「内線の子機をお持ちしましたので、今日からこれを枕元に置いておいて下さい。番号はこちらに…」

差し出された子機と充電器を悠羅が受け取るのを確認すると、ユウナは一礼して部屋を出て行った。

「お支度が整いましたら、居間にお越し下さい。」

それを確認してから、悠羅は一息ついた。
朝から驚かされる。

今までとはまったく違う生活に。

こうやって、朝起きて、誰かの顔を最後にみたのは、いったいどれくらい前だろうか。

それさえも思い出せない。

ずっと、一人で生活していたのだから。いや、一人と言うと語弊がある。

実際は、父親と二人暮らしだった。

とはいっても、お互いに顔を合わすことも珍しく、一カ月に一回顔を合わせば良い方で、でもそれは別に仲がいいとか、悪いとかではなく、ただ、職業的に父親は忙しく、自分と生活リズムが違っていたからだ。

それに、父はことは別の家も持っていた。

母親のことは分らない。父も何も言わなかった。

自分から聞こうともしなかった。

週に三回、お手伝いさんの来てくれる生活に不便はないし、それでいいと思っていた。

だから、こうやって誰かに起こされることなんて、思いもよらなくて、今朝はびっくりした。

ここに来たのは、叔母に誘われたからだ。

三ヶ月前、ある日、突然現れた叔母はこう言った。

『お久しぶり、悠くん？』

悠くん。

久しぶり話す甥にも気さくな叔母。

久しぶりとはいっても、俺にその記憶はないから、ほぼ初対面に近い。

向こうは自分のことを良く知っているようではあるが。

彼女は、父の姉とは思えないほど、陽気な人だった。

いや、実際自分の父親とろくに話すことすらない自分には、父がどういった人かも、父の”見せている”表面しか知らない。
『うーん、達也の若い頃そっくりね。良い男になるわよー』
そう言って笑う叔母。

自分の弟を良い男と認めているらしい。

『達也は、相変わらずブラウン管の中で忙しいようね…』
苦笑交じりに呟くと、申し訳なさそうに自分を見てきた。
どうして叔母がこんな表情をするのかは分からなかった。

『そうですね…』

俺は、点いていないテレビを見た。

そこは、家にいない父の姿を良く映している。
会うことはなくても、そこで父を一方的に見ることは出来た。
父は俳優で、人気も高かった。

その反面、プライベートは謎で、きっと俺が達也の子供だと言うことを知っているのは、この叔母くらいなのだと思う。

『それでね、悠くん。今日は悠くんに用があつて来たの』

『はい…？』

『悠くんさえ良かったら、家で住まない？』

そんなことをさらっと口にして、叔母は目の前にある熱い珈琲に口付けた。

『あら、この珈琲美味しいわ。悠くん淹れるの上手いわねー』
どうやら、マイペースな人らしい。

本当に父の姉なのだろうかと疑ってしまふ。

『私は間違いないく達也の姉よ？』

人の心境を読むのが上手いらしい。

絶句している俺を、楽しそうに見ている。

『悠くん、次高校生でしょ？』

『あ、はい…』

いきなりの質問に一瞬身体がびくつとなった。
この人と話しているとペースが乱される…。

『それで、よかったらこっちの高校受けて、春から一緒に住まないかなって思って』

『思ってたって…いきなり…』

『嫌かしら？』

『いえ、嫌と言うわけじゃなくて…』

『高校もう決めてるの？』

『いえ…』

決めていなかった。

特に行きたいところもしたいこともないし、進学しようかさえ悩んでいたところだ。

『こっちにね、良い高校があるのよ、良かったらそこ受けて見ない？』

『いえ、そんな急に…』

『あら、悠くん成績悪くないでしょ？』

『悪くはないですけど…』

『じゃあ、大丈夫よ。うちの娘…あ、家にも悠くんと同い年の娘がいてね、その子がこれがまた誰に似たのか英語が苦手ね。そのせいで今ひいひい言いながら塾通いしててねー馬鹿よねー』

『あの…』

『ああ、それはどうでも良い話ね。で、その娘が行く高校がね、良い高校なのよ。あなたのお父さんも、私も通った学校よ。去年、改築が完成してね、かなり綺麗になってるわよー。羨ましいわ。で、あなたさえよかったら是非その学校を勧めたいの』

『…は、はあ』

『一度受験してみましようよ、これ。パンフレット。一応目を通してね？』

そう言って、その日は叔母はそのまま帰った。

その後は嵐が去ったようだった。

その時のことを思い出して苦笑する。

その後、極め付けがあつた。

願書締め切り三日前、叔母はまた俺の前に現れたのだ。

『悠く〜ん?』

『は、はい…』

また、何故か家に入れてしまったのだ。

そしてまた後悔する。

どうやら氣に言つたらしい俺の淹れた珈琲に口付けながら目を細め睨んできた。

そして

『…豆変えた?』

『……』

『私、前の方が良かったわ』

何てことを口にする。

『つてそうじゃなくて、願書、出してないでしょ?』

『う…何でそれを…』

『叔母さんに知らないことなんてないのよ』

そう叔母は言い切つた。その言葉に何故か納得してしまう。

『で、パンフレットは見たの?』

『はい…』

『どうだつた?』

珈琲を啜りながら叔母が尋ねてくる。

パンフレットは確かに目を通した。

綺麗な校舎。良さそうな校風。

この辺りにある高校より良いと思った。

『嫌かしら?』

『いえ、嫌と言うわけでは…』

本当だつた。実際、その学校には惹かれる部分があつたから。

だが、話は別にある。

叔母の世話になるとのことだ。

叔母には叔母の家庭がある。

それを邪魔することが悪いと思った。

そんな俺の心中を察したのか、叔母が再度口を開く。

『家の事ならいいのよ？家の家は達也の家でもあるんだし』

『……』

『元々、あの家は達也に相続の権利があつたのよ。でも、達也が住む気がないみたいだし、私たちが住んでるだけ。ってわけで、決定ね』

『は…？』

どういうわけなのだろうと思うが、叔母は有無を言わせぬ態度でこう言った。

『さ、今すぐ願書、書きなさい』

俺にとって、叔母の印象は強烈だったのだ。

だから、ここに来るときも、内心どんな生活が待っているのだろうとびくびくしていた。

それが、だ。

ここに来て、叔母は居なかった。

居たのは、従姉妹の玲奈と、メイドのユウナだけだったのだ。

「あはは、お母さんね、お父さんの単身赴任に付いて遺跡堀いっちやったー」

あっけらかんとそう言う玲奈の言葉に、俺は絶句した。

「帰って来られるのは当然先かと思えます…何せ行き先が分からないもので…」

ユウナまでそんなことを言い出したのだ。

とたん、家の電話が鳴り出す。

ユウナが慌てて受話すると、相手と2、3言話し、すぐにこちらに受話器を持ってきた。

「え…？」

「玲香様です」

ユウナの言葉にまた驚く。

あの人は、本当に不思議な能力でもあるのではないかと思った。

「もし、もし…?」

「あ、悠くん?」

ごく自然に切り出す。

「ごめんねー、急に。びつくりした?」

びつくりしない人はいないと思う。

そう心の中で呟く。

「うーん、そうよねえ」

「…!?」

「まあ、私もびつくりしたのよ。いきなりでねえ」

嘘だ、絶対嘘だ。

この楽しそうな声が全てを語っている。

「ま、そういうことで、うちの玲奈よろしくね、そのうち飽きたら帰るから」

がちやつ、つーつー…

後に残されたのは虚しい音だけだった。

今思い出しても強烈な人だと思う。

嫌ではなかった。

今までの平凡な生活とは違ったから、戸惑いはあったが、残りの春休みを過ごしたここでの生活は、前の一人での生活よりも楽しかった。

そんなことを思い出しながら、身支度を整える。

上着を羽織ったとき、真新しい制服の匂いが広がった。

居間に着くと、玲奈が座ってお味噌汁を啜っていた。

葉月家の朝は朝は和食と決まっているらしい。

お味噌汁と焼き魚の良い香りがしていた。

「あ、ゆんゆんおはよー、先に食べてるよー?」

「うん、おはよう」

” ゆんゆん ” それは、玲奈が俺に付けた愛称だった。初めは抵抗があったものの今ではすっかり慣れた。

そして、この数日で、俺も ” 玲奈 ” と呼ぶ事に慣れた。

初めてあったイトコと言っても同じ年、気軽に呼び合うほうが良いに決まっている。

「おはようございます、お食事をどうぞ」

後からやってきたユウナさんが、俺の分の食事を運んでくれる。

こうやって、朝から美味しい食事が用意される生活は、嬉しいものだ。

席に着いて、食事を口に運ぶ。

うん、今日も美味しい。

「それにしても、ゆんゆん朝弱いねー？」

「う…」

「私も朝からあんなに声を出すの苦しかったです…」

「うう…」

「玲奈だって春休み中は昼過ぎに起きてただろ…？」

反撃を開始すると、今度は玲奈が口籠る。

「う…」

そう、玲奈が今日早かったのは、単に入学式、いつもと違った日が楽しみだったからなのである。

普段は悠羅と同じ、自分では起きられない人種だ。

いや、悠羅よりも玲奈の方が数段上だった。

「お二人とも、もう高校生になられたのですから、もっと御自分で責任持つてくださいね」

そうユウナに窘められ、二人は声を揃えて返事をした。

「それはそうと、悠羅様」

「うん？」

悠羅は魚の小骨を取り除きながら、顔だけユウナに向けた。

「今朝、魔されていたようでしたが、大丈夫ですか？」

「あー、うん。」

「んー、夢で魘されてたの？」

「うーん。多分色々見てるんだろうけど、起きたときには少ししか覚えてない何か昔からたまに見る夢があつて」

「ふーん？」

玲奈が橋を口に咥えながら興味深そうに聞いている。

いつもなら、そんな玲奈を行儀が悪いと叱るユウナだが、今日は違つていた。

「昔からですか…？」

「うーん？うん」

昔から…

でも、最近良く見るなと思う。

「どんな…」

珍しくユウナが深く尋ねようとしたとき、玲奈が叫んだ。

「あっ！」

「ど、どうした？」

悠羅の意識がそつちに集中する。

「にゅ、入学式の時間間違えてた…集合九時じゃなくて八時半…！」

「！？」

「ゆ、ゆんゆん、急いで…！」
食べかけの食事を恨めしく見ながらも、即座にカバンを持って家を出なければ行けなくなった。

「何で確認しないのっ！」

「じゃあなんでゆんゆんも見とかなかったの！」

「うっうっうっ」

「ってこんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

「そ、そうだな」

どたばたと、玄関に走る。

振り返り、見送りに出てくれているユウナさんに「行って来ます！」と叫ぶと、二人は一斉に飛び出した。

後に残されたユウナさんが苦笑交じりに溜息を付きながら後を見送った。

「いつてらっしやいませ。」

Act・3 『珈琲の美味しい喫茶店』

――私立・川瀬学園。

その由来は、直ぐ近くに流れている、川瀬河から来ている。
この時代にしては珍しい、透き通った綺麗な川は、この街の自慢の一つだった。

そこに通う学生は毎日この川瀬河を見ながら登校してくる。
通学時間になると、道を行き交う紺色の制服。

女子の冬服は、緑を主としたチェックのプリーツに紺のハイソックス、丸襟の白いブラウス。その上から紺のブレザーを羽織る形になっていた。胸元には、学年ごとに違うリボンがつけられる。一年生は赤、二年生は緑、三年生は紺。

男子の方も、女子と同じ柄のスボンに、カッターシャツ、上着に紺のブレザーを羽織る。標準でこちらにも学年ごとに色の違うネクタイがつけられているが、厳しく義務付けられているわけでもない。それがつけられるのは服装検査や式典の時くらいだった。
今日は、そんな川瀬学園の入学式。

入学式から目立つ二人がいた。

余裕を持って登校し、すでにクラスを確認して教室で友達作りに励んでいるという一般的新入生の様子の中、そんなことはお構いなしに、集合時間ギリギリという時間で駆け込んできた男女二人。
手には、無残に丸められたパンフレット。

入学式当日の初顔合わせ。

それは特に目立っていた。

それはそうだろう。

入学式当日から少年と少女が一緒に登校してきたのだから、事情

を知らない人間は好奇の目で二人を見る。

「あゝ、間に合った！」

「良かったな…」

「席どこ？」

「黒板にあるじゃん、あれだろ」

そう言つて悠羅が指差す。

「つて、玲奈、隣じゃん」

「え？ほんと？」

確認すると、確かに隣同士だった。しかも、運のよい事に後ろから二番列目の席だ。

中込悠羅・葉月玲奈。

二人の名前は隣同士に書かれていた。

きつと、出席番号順で振り分けられたのだろう。

「仕組まれたようだな…クラスまで一緒だし…」

「あはは、いくらなんでも偶然偶然…つて」

そこで、二人ははつと気づく。

教室中の目が自分たちに集中していたのだから。

その視線の意味するところに気づいて、思わず俯いて足早にあてがわれた席に着く。

「うっ、入学式から目立つちゃった…ゆんゆんのせいだ…」

「人のせいにするなよ…」

「そんな事言つたつて！高校入ったら素敵な彼氏作るんだつて思つてたのに…誤解されてたらどうしょ…変な噂までたつたら…」

一気に変な考えに飛躍する玲奈に、悠羅が口を開きかける。

「あのな…」

すると、平然と言い切つた。

「冗談だよ。あはは、入学式から目立つてこれで掴みはばっちりだね！」

ぴつとVサインまで見せてくる。

こいつ…

何てやりとりをしていたら、後ろからくすくすと笑い声が聞こえてきた。

「くすくす、朝から賑やかだね」

悠羅と玲奈が同時に声のしたほうを振り返ると、少女は玲奈に手を振ってきた。

「あーっ！紗枝ちゃん！」

「おはよ、玲奈ちゃん。やったね、同じクラスだよ」

「ほんと！？わたし遅刻しかけてクラス分け詳しく見れなくて…でも紗枝ちゃんと一緒だなんてうれしいよう！」

最後の辺りから玲奈が飛びつく勢いで紗枝に抱きつくと、紗枝も同じように手を伸ばし玲奈の頭を撫でてやる。

「同じクラスなんて小学校の五年の時以来だね！」

嬉しそうな玲奈の様子に紗枝はうんうん頷き返すと、視線を悠羅に移した。

少女の色素の薄い栗色のその髪によく似た瞳と悠羅の瞳が出会う。

「…え？」

一瞬、少女の目付きが変わった気がしたが気のせいだろうか、次の瞬間には先程の笑顔に戻っていた。

「あ、紗枝ちゃん、こっちが前に話したゆんゆん」

「玲奈、ゆんゆん云うな…っていうかきちんと紹介して…」

「もー、そっちが好きなように呼んでいいっていうからゆんゆんにしたんじゃない」

「そうは云ったけど、まさかそんなのつけられると思わなかったからで…ってか人前で呼ぶなよ…」

「いまさら無理だよ」

「おい」

悠羅が突っ込むが、玲奈はお構いなしに話を続けた。

「で、こっちが私の親友の堀江紗枝ちゃん」

再び紗枝の腕に抱きつきながら玲奈が紗枝を紹介する。

「紗枝ちゃんね、小学校が一緒に、中学は学区のの違いで離れちゃ

「ただんだけどそれから、ずっと仲良しのお友達なの、ねー？」

「うん、そういうことだから、よろしくね、中込くん？」

「え…なんで俺の名前…」

「中込くんのは玲奈ちゃんから電話とかで聞いてるから」

「ああ、なるほど、えと、じゃあ、よろしく、堀江さん？」

「ああ、紗枝でいいよ」

「うん、じゃあ、紗枝、よろしく。俺のことも好きに呼んでくれていいよ」

「んー…じゃあ、ゆんゆん？」

「…それは勘弁して…」

「くすくす、じゃあ、ゆうくんね」

「ん」

丁度話しが一段落ついたところで、再び教室のドアが勢い良く開けられる。

教室中の注目がそこに集まるそこには、若い女性が立って居た。

見るからに、教師であるその人物は一度そこで辺りを見回し、笑顔で教卓前まで来ると、皆に席に着くよう指示した。

生徒が大人しく席に着いたのを確認すると、満足そうにチョークを持って黒板に名前を書き、振り返る。

「はい、皆さん、今日からこのクラス、一年一組の美女担任、朝倉みなみです」

妙に最後を間延びした挨拶を口にする。

20代半ばと行ったところだろうか。

それにしても、自分で美女と言い切る辺り、凄い担任である事に間違いはないとクラス一同確信する。

それでも、楽しそうな先生に恵まれたと、また一つ高校生活に期待を膨らませるものも多かった。

「九時から入学式ね、それまで何か適当にオリエンテーションしろって言われたんだけど…」

そこまで言って、みなみが口を止めた。

じつと何かを探すように教室中を見る。

「そこっ！」

急にびしつと指を指す。

教師が人を指差す行為というのもどうかと思うが、それを突っ込む者ここには居なかった。

「え…？」

たった今、いきなり指を指された悠羅がびっくりしてみなみを見る。

目が合うと、その担任教師はにっこりと笑ってこう言った。

「あなた、委員長やって、ね」

「…はい？」

「やってくれないかなー？これさ、実は今日の職員会までに決めとけて言われてるのよね。しかも、投票となるとあれでしょ？紙に書いてあつめてゝって。資源の無駄だし、面倒だし、ここは中込君が…ね？」

「理由になつてな…」

「あらあら、中込君は入学早々、教師の決定に逆らうのかしら？」

「う…」

有無も言わさぬ笑顔と言葉で悠羅とやり込めると、みなみは再び辺りを見渡しながら新たな標的を物色しだす。

「で、副委員長は女子の方で鈴木なつきさんをお願いしたいんだけど…いいかしら？」

指名を受けたなつきは、悠羅とは違い、ことその他、あっさりと返事を返した。

「はい」

決定されると、悠羅となつきが教壇に呼ばれ、クラスメイトの前で紹介される。

「えと、鈴木さん…だっけ？不満は無いの…？」

悠羅がおずおずと隣に立っている副委員長に指名された鈴木なつきという少女に話しかけた。

もちろん話すのは今が初めてだ。

「別に…いつも指名されてますし、なれてますから。」

返って来たのはそっけない返事だけだった。

こうして、悠羅は否応無くして名実ともにこのクラスの委員長となったのである。

「何で俺が…」

ここは紗枝の兄の運営している珈琲専門の喫茶店。

帰り際、二人は招待されたのである。

「まあだ言ってるの？」

玲奈がチョコレートパフェを長いスプーンでつつきながらその話題には飽きたという風に悠羅を見る。

「まだって言うけどな、俺は納得しないまま委員長にされたんだぞ」
そう、オリエンテーションのみなみの指名に、口を出すものも無く、あっさりと悠羅は委員長の座についた。いや、就かされたといったほうが正しい。

副委員長の方も、みなみが指名していたが、そちらの方まで気が回らなかった。

「鈴木なつきさんだっけ、副委員長に指名されてた子？」

紗枝が、ティーカップを包むように持ちながら、ダージリンに口付けた。

ここは珈琲専門の喫茶店である。

「あっちだけ、いいかしらってお願ひしてたよね」

「そう言われて見ればそうだね、ゆんゆんだけ…気に入られちゃったんだね、あはは」

「あはっ、よかったね、ゆうくん」

「…」

「それにしても、うちって三年間基本的にクラス変えないから、な

んか皆ずるずると三年間委員長つていうケース多いらしいよ?」

「え、席替えないの?」

「席替えじゃなくてクラス替えね、玲奈ちゃん」

「俺…三年間…ずっと…?」

悠羅が頂垂れる。

今までそんな面倒な役職からは逃げこれたのに、ここに来て神様は見放されたいらしい。

「でもさ、決まったものは仕方ないよ、満場一致だったし」

「玲奈…人事だと思って言ってるだろ…」

「だって人事じゃん。このパフェ美味しいね、紗枝ちゃん」

「おい…」

「でしょ?お兄ちゃん、紅茶淹れるのも上手いのよ。今度アッサムにしようかな」

そう言いながら、紗枝がまたカップに口を付ける。

しつこいようだが、ここは珈琲専門店。

珈琲をともに頼んだのは、悠羅だけであつたが。

「ゆうくんも、飲んだら?冷めちゃうよ?」

紗枝に促され、納得はしていないものの、折角出して貰ったのに
と思い、溜息を一つついた後で口に運んだ。

「あ…、美味しい」

「でしょ?お兄ちゃん、淹れるの上手いのよ。それだけが特技な人だから。でもあんまり褒めちゃだめよ、一度褒めちゃうと…」

紗枝が悠羅に忠告しているとき、兄の誠人が顔を出した。

丁度客がいなくなつて一段落着いたらしい。

「こんにちは、ゆっくり挨拶出来なくてごめんね。えーと…悠羅くん?早速、良いお友達が出来たみたいでよかった。ゆっくりして
いてね。玲奈ちゃんも、紗枝をよろしくね」

そう微笑む誠人を見ながら、玲奈が紗枝にこっそり呟く。

「やっぱ紗枝ちゃんのお兄さん、すっごい優しいね…いいなあ…」

一人っ子の玲奈は、兄弟、特に兄に憧れていた。

だから、余計にそう思う。

「アレさえ無かったらね……」

そんな玲奈の心境を知ってか知らずか、紗枝がぼそつと呟いた。

「アレって……？」

「見てれば分かると思う……あは……」

すごく意味深な笑い方をする紗枝に、悠羅が首を傾げた。

「処で、悠羅くん」

誠人の視線が悠羅に集中する。

そこに在らぬ物を感じたのか、悠羅が一瞬たじろいだ。

「はい……？」

「君は珈琲が好きかい？」

何故か、誠人の目がこの上なく輝いている。

しかも、身体が乗り出してきているものだから、反射的に悠羅は引いてしまう。

「ほら来た……」

紗枝が悪態を着く。

「え……？」

「ちよつとお兄ちゃん！ゆうくんは私の友達なんだからね！」

だんつと机を叩いて、紗枝が立った。

あまりの勢いで、机の上にあった食器やらが一瞬宙に浮いた。

「さ、紗枝……！」

「紗枝ちゃんっ……！」

驚きながらも、玲奈は自分のチョコレートパフェだけを胸にしっかりと握り締めるように死守していた。

「……………」

「……………」

約一分間、紗枝と誠人がお互いを見合う。

その様子を、悠羅はハラハラ、玲奈はどきどきしながら見ていた。

「……………」

すつと、先に誠人が視線を外す。

「紗枝も昔は素直な子だったのに…それが最近じゃ、ポルノポルノと破廉恥なものにはまってしまったみたいで…最近の若い子はこうなのかい？はしたない…」

紗枝を見ながら、これ見よがしにまた大きく息を吐く。

「お兄ちゃんっ！だからそれはポルノグラフィティーっていうバンドのっ…」

「ポルノのグラフィックスがどうした」

「……お兄ちゃんのばかっ！」

紗枝が本気で怒っているのを無視して、放心状態の悠羅と玲奈に誠人が声を掛ける。

「二人とも、変な妹だけどこれからも仲良くしてやってね」

困ったような、兄の顔をして、そして去っていく。

「……………」

「お兄ちゃん…変だから…」

そんな紗枝の呟きに、二人はフオー出来なかった。

その後は、すぐにお客が入ったせいか、誠人の邪魔も入ることなく、三人は色々な話をしながら過ごすことが出来た。

その後は、和やかに会話が広がる。

「二人はイトコで、最近一緒に住みだしたんでしょ？」

「うん、そうなるね」

無心にパフェをついついている玲奈の代わりに、悠羅が、適当に紗枝に返事を返す。

「へへへ」

「なんだよ？」

さっきから笑っている紗枝がここぞとばかりに乗り出した。

「で？」

「で…って？」

「そう言ったら、二人の進展度に決まってるでしょ？若い男女が屋根の下、だったらやっぱあるでしょ」

「あるって…？」

怪訝そうに紗枝を見る悠羅。

「こつ、若い男女特有の甘い話が」

「……」

紗枝の発言に、悠羅は一瞬固まり、次の瞬間表情を崩す。

「ないない……」

「えー？ほんとに？」

紗枝が疑いの目で悠羅を見る。

「それに、二人つきりってわけじゃないぞ、ユウナさんも居るし。な？」

そこで、悠羅が玲奈に話を振ると、やっと玲奈がスプーンの動きをとめた。

「ん……？だねー、ゆんゆんはどっちかって言うとお母さんみたいだし」

「お前な……」

「ふーん、じゃあ、ゆうくん！その年上のメイドさんと禁断の恋の予感はい？」

「禁断って……お前、楽しがってるだろ……」

「……あはっ」

紗枝と言う人間は、この笑顔で人生乗り切ってきたのではないかと思う。

辺りが赤くなり出した頃、二人は帰路に着いた。

まだまだ喋り足りない玲奈と紗枝であったが、悠羅が無理やり連れ帰る。

もう、夕飯の時間だ。

「ガッコ、楽しそうだね。紗枝ちゃんも一緒だし」

上機嫌に玲奈が数歩先を歩く。

「……そうだな」

委員長に指名されたり、ハプニングはあったけれど、悠羅もそれ

なりに学校が気に入っていた。

「川瀬の水面、赤く染まって綺麗だねー」

これから毎日この川を見ながら学校に通う。

「ど、こっち来てよかった？」

くるつと振り返りながら、玲奈が悠羅に尋ねてきた。

「…そうだな」

「って、さっきからそうだなしか言っていないよ！」

「ま、いいじゃん、な」

「良くない！わたしはゆんゆんと同じクラスになれて嬉しいのに」

「…さ、帰るぞ。ユウナさんが待ってる」

そう言って悠羅が先を歩き出す。

「んもう」

その後を、追うように玲奈が着いていく。

「ほら、今日ご馳走だって言ってなかったか？入学祝に」

「ほんとだっ！早く帰らなきゃ」

もう、家はすぐそこだった。

Act・4 『空から降ってきた少女』

「ゆんゆん」

その日最後の授業終了のチャイムが鳴っても、眠ってしまったていたせいか思考が思うように働かずしばらく机に座ったままぼーとしてる悠羅の耳に、玲奈の呼び声が入る。

「…ん？」

ぼんやりと視点を移すと、手に持っていたごみ箱を差し出して来た。

「ゆんゆん今週、掃除当番だよ、はい。」

「あー…」

理解したのかしてないのか、まだ動こうとしない悠羅を、玲奈は容赦なくごみ箱で殴る。

「っ…！」

痛みに一瞬思考が真っ白になるが、無常にも玲奈は言い放つ。

「掃除の邪魔。さっさと行ってきなさい。」

その凄みに負け、ごみ箱を持たされた悠羅は即座に席を立った。

「寝起き悪いのどうにかならないかなあ…」

後を見送りながらため息をつく玲奈の横で、それまで楽しそうに二人を見ていた紗枝が近寄ってくる。

「あは、玲奈ちゃんったら意味深発言」

「紗枝ちゃん」

「ゆうくんって家でもあんな感じなの？」

丁度今悠羅の出でいった教室のドアに視線を向けながら紗枝が尋ねる。

「ん…多分」

「多分？」

「だって、普段はユウナさんがゆんゆん起こしてるから。大体は子機で内線すればちゃんと朝は出るんだけどね。それでもやっぱり居

間来たときも今みたいにぼーっとしてるよ」

「ふーん…起きるの苦手な玲奈ちゃんといい勝負だね？どうせ、毎日二人してユウナさん困らせてるんでしょ？くすくす」

「それは…でも、わたしはゆんゆんみたいに覚醒遅くないもん！」

「はいはい…くすくす」

「紗枝ちゃん？」

玲奈と紗枝がそんな談笑をしていると、バシッと勢い良く教室の扉が開かれた。

「ここに荻原さん来ませんでしたか！？」

そこにいたのは、生活指導の安井だった。

「や、安井先生…？」

丁度目が合った先にいたのは、玲奈と紗枝に、安井が問う。

「荻原さん…？」

問われても、入学して間もない玲奈に、その人物の特定が出来ない。

クラスメイトの半分の名前も覚えていないのが現状だ。

「先生、荻原さんはまだ見てないです。彼女もう登校できるんですか？」

そんな玲奈の代わりに口を挟んだのは紗枝だった。

「どうやら、その荻原という人物を知っているらしい。」

「ええ、明日から…って今はそれどころじゃないんです、いないなら失礼したわね。掃除はしっかりするように」

そういつて安井は足早に教室を去った。

「紗枝ちゃんー、荻原さんって？」

「あ、玲奈ちゃんは知らないわよね。荻原さんは前に私と同じ中学だった女の子。クラスも一緒だよ。ほら、あそこの一番後ろの席空いてるでしょ？そこ、荻原さんの席なの」

そういつて、紗枝が今は何もない席に視線を送る。

「ああ、あそこの入学式からずっと空いてる席？もう入学式終わって1週間くらい経つのに空いたままおかしいなって思ってたんだだけ

ど、その席の子が今日来てるのかな？ね、紗枝ちゃん、どんな子？
荻原さんって」

「んー…」

興味深げに尋ねてくる玲奈に、紗枝は何故か曖昧な笑みを浮かべ、
言葉を濁そうとする。

「紗枝ちゃん？」

「明日、本人見て見れば分かると思う、先入観持つのは良くないし
ね…」

そついう紗枝の発言には、多分に他意がこもっているようだった。

一方、無理矢理ごみ捨ての任に指名され、出された悠羅は校舎裏
の焼却炉まで歩いていた。

とはいえ、焼却炉自体は環境問題のためとかで使われておらず、
ただのごみ置場とされていた。

そこそこにごみの入った箱をぶらぶらと持ちながら歩く。

校舎裏には普段使われない非常階段がある。

ちようどそこに差し掛かったときのことだ。

「どいてっー！」

頭上から振ってくる声。いや、声だけではない。

「え…？」

悠羅が上を向くのが早いか、それが落ちてきたのが早いか計り兼
ねるが、次の瞬間、あたりに悲鳴が沸き起こる。

「きゃあああっ！」

「うわっ…っ！」

どさつと音がするのと、悠羅が倒れるのはほぼ同時だった。

「痛っ…」

倒れた拍子に打ちつけた頭と腰は、上からの衝撃で倍加する。

それでも、何とか後頭部に手を当てながら軽く上半身を起こし、

目を開くと、丁度その痛みの元凶と顔が近い位置に合った。

「……」

思いのほか顔が近かったことと、倒れた悠羅に丁度少女が上乗りになるという体勢に、痛みを忘れて悠羅が固まる。

そして何より悠羅を固まらせたのは、少女の最初の第一声だった。「もー！どいてっていったじゃないっ！何でこんなところに人がいるのよ！」

明らかな責任転嫁だ。

あまりのことに放心している悠羅に、少女はお構いなしに続けた。

「……で、見た？」

「え……？」

「見たかって聞いているの！」

「何を……？」

顔を赤らめて詰め寄ってくるが、悠羅には何があだか分からなかった。

「ぱ、ぱんつ見えたかって聞いているんでしょっ！」

「……」

「答えなさいよ！」

「あ……」

やっと少女がどうして怒っているのかわかった、照れ隠しなのだ、きつと。

「見てないよ」

「ほっ、ほんとー！？」

「うん、なんかもう一瞬の出来事で振り返った瞬間真っ暗に……だからさ、もうそこ退いてくれないかな……」

今度は悠羅が顔を赤らめた。

「え……？あっ」

少女が頬を赤らめながら飛び退く。

「ご、ごめんなさ……」

「ふーん？」

少女が謝ると同時に、違う声が聞こえた。

「え？」

その方向を悠羅が嫌な予感たつぷりで振り向く。

そこには、なんとも形容し難い表情の玲奈と、楽しそうに笑っている紗枝の姿が合った。

「ゆんゆん、何してるの？」

顔は笑っているはずなのに、その言葉に怒りが感じられるのは何故だろう。

「くすくす、ゆうくんたら…いくら人目につかない場所とはいっても今は掃除中だから他の生徒もくる可能性があるわよ」

紗枝はやはり紗枝で、無責任なことを言ってくる。

「これは…」

慌てて悠羅が否定しようとするが、そんなもの耳に入るわけがない。

「ゴミ箱一つ忘れていったから持って来たの。はい、どうぞ」

そういつて悠羅に押し付ける玲奈の顔は、やはり笑っているように笑ってはいなかった。

「あゆちゃん、先生が探してたよ？」

そんな二人を見ながら笑っていた紗枝がもう一人の少女に向き直り話しかける。

「あつ、私逃げてたんだった！」

「今度は何したの？」

紗枝の問い掛けに、バツの悪そうな顔で少女は答える。

「ちよつと…挨拶で学校来たついでに校内でローリースケートで走っただけだよ…」

「痛い目に合っても変わらないね、あゆちゃんは」

くすくす笑っている紗枝が、二人の視線に気づき、紹介する。

「ほら、玲奈ちゃん。この子が先生の探してたあゆちゃんだよ。あゆちゃん、この二人も私と一緒に、クラスメイトだよ、自己紹介して」

「…荻原歩美です、よろしく」

「葉月玲奈です、よろしくね。…でも、どうしてこんな時期に？」

玲奈の疑問に、紗枝は笑い、歩美は再び顔を顰める。

「あのね、玲奈ちゃん。あゆちゃん、春休みにバイクの免許取るために教習通ってたの。誕生日が四月だから仮免までは取れるから。で、まだ免許持っていないのにバイク乗りまわしてて、事故っちゃったのよ。学校には交通事故っていつてあるんだけどねー。あは」

そんな内部事情に詳しい紗枝に、歩美が目丸くした。

「な、なんで紗枝ちゃんそんなこと知ってるの…誰にも話してないのに…」

「あゆちゃん、私の情報網甘く見ないでね」

「……相変わらず紗枝ちゃんもすごいね」

歩美は嘆息し、今度は悠羅に目を向けた。

「…大丈夫？」

「あ、うん…」

歩美も落ち着いて来たのか、先程とは違い冷静になり、悠羅に手を差し出した。

悠羅もその手を借りやつと身を起こす。

「ふうん」

その様子を見てまた玲奈の笑顔が凍っていく。

「れ、玲奈…？」

「ん？なあに？」

明らかに声の調子とは違い、寒気すら覚える笑顔。

「これはたまたま…その、荻原さんが…」

「へえ、もう名前も覚えてんだ」

「今いつてただろ」

「へえ」

「何で怒ってるの…」

「何でわたしが怒るの？別に、ゆんゆんが誰と何しようとかわたしには関係ないし？」

そんな二人を歩美がおろおろと見る。

「…二人、付き会ってるの？」

紗枝に歩美が小声で問うが、それに返したのは玲奈だ。

「違うよ、ゆんゆんはただの従弟だから」

「う…え…？」

いきなり自分の方を向かれ、歩美が困ったように紗枝に視線を送る。

「らしいよ、あゆちゃん」

「らしいっていうかそうだよ」

「はいはい」

むっとして言い返す玲奈を紗枝が窘めながら悠羅に目を向けると、嫌な予感がして、悠羅がびくつとする。

「ゆうくん、いいものを見せてもらっちゃった。」

「紗枝…」

「私、新しく出来たハーゲンダッツの専門店行きたいなあ」

「分かった、奢るから…」

「ほんと？やった、ゆうくんが何でも奢ってくれるって、やったね、玲奈ちゃん、あゆちゃん」

満足気に微笑む紗枝に嬉しそうに玲奈が拍手する。

「それじゃあ、わたしは黒ぶどうとグレープフルーツのダブルで」

「シングル…」

「ダブルね」

「分かったよ…」

「わーい、ユウナさんにもお土産ね？」

「…分かった」

「決まりだね、じゃ、早速いこっか」

何故か紗枝が仕切る。

そんなやり取りをただ見ているしか出来なかった歩美に悠羅が視線を送った。

「ええと、荻原さん…だっけ？」

「え？あ、はい」

「一緒に行こうか」

「え…でも…」

「折角ゆんゆんが奢ってくれるんだから一緒にいこーよー」

遠慮がちに玲奈を見る歩美に、玲奈が声を掛ける。

「でも…邪魔じゃないですか…?」

「大丈夫大丈夫、折角クラスメイトになるんだし、ね?何より奢りだよ!いかなきゃ損だよ!」

「玲奈…」

もはや玲奈の頭の中はハーゲンダッツでいっぱいになっている。

「紗枝ちゃん…」

困って紗枝の方を見る歩美に、紗枝も笑って誘いかける。

「行こうよ、久しぶりに私もあゆちゃんとお話したいな」

「紗枝ちゃんがそういうなら…」

「事故の詳しいことも聞きたいしね?」

につこりと笑った紗枝に歩美が引いたのはいうまでもなかった。

ところ変わってここはハーゲンダッツの専門店。

玲奈は10分ほど悩んで店員を困らせた末にグレープフルーツ&ピーチパフェを、悠羅はドルセ・デ・レチェのキャラメル味、紗枝は抹茶黒ゴマパフェ、歩美はシトラスサングリアというスカッシュを頼んだ。

すっかりとお目当てのアイスを手に取り、会計は悠羅に任せ、三人は先に席を確保する。

「あんまり混んでなくて良かったね」

「この時間だと下校と重なって込むもんねー」

などと話していると、悠羅が戻ってくる。

「ふう…」

「溜息なんかついちゃって、おじさんみたいだよ?」

「玲奈、食べなくていいぞ」

「う…ごめんなさい、撤回します」

「ふん」

慌てて玲奈が自分の分を抱える。

「くすくす、ほら、ゆうくん、食べないと溶けちゃうわよ？」

「あー、うん。これ結構甘そうだな…」

「食べられないならわたし食べたげようか？」

「玲奈、お腹壊すよ」

そんな感じでいつもどおりな会話を繰り返しているが、一人歩美だけはまだ馴染みきれなかった。

「あ、荻原さん、大丈夫？この二人変だからついていくの大変ですよ」

「え？そんなこと…」

歩美に話しかける悠羅に玲奈の肘鉄が入る。

「がはっ」

「変なのはゆんゆんもでしょ」

「自分が変だって認めるなよ…」

「うつさい。」

睨んで悠羅を黙らせると、歩美の方に向き直り、笑顔を作り直す。

「あゆちゃん、でいい？」

「あ、うん。いいよ」

「私のことは好きに呼んでくれていいよ」

「じゃあ…紗枝ちゃんと一緒、玲奈ちゃんでもいいかな…？」

「うんうん、いいよお。そっちのゆんゆんはゆうちゃんでもなんでも好きに呼んであげてね」

「おい」

「ゆうちゃん…？」

「それだけは止めて…」

必死の悠羅の願いもあって、結局呼び方は「ゆうくん」に定着した。

玲奈は面白くないと不服そうだったがそれはあえて無視する。

「それで、あゆちゃんはどうしてバイクで事故になんて遇っちゃったの？」

紗枝が直球で聞きにくい事をはっきりと尋ねてくるので、歩美はばつが悪そうに悠羅に奢って貰ったスカッシュを一口、わざと音を立てて飲む。

「ちよつとした不慮の事故で…」

「どんな？」

につこり笑顔で事情聴取モードに入っている紗枝から歩美が話を逸らそうと言葉を探るが、どうしようもなく、逃げられるはずがなかった。玲奈と悠羅も興味深そうに見ている。

「…ちよつと…」

「ちよつと？」

「バイクの下敷きになって両足骨折しちゃったんだよ…」

「他人の？」

「じ、自分のだよ！夜こっそり運転しようとしてやっちゃったんだもん…朝まで見つけて貰えなかったし…痛かったよ…」

「あゆちゃん、それって自分の庭でしかも相手いないんでしょ？」

「う」

「ねえ、それって交通事故なの？」

最後の言いにくい部分をあっさり口にしたのは玲奈だ。

実際は悠羅に尋ねたのだが、声が大きかったのももちろん歩美の耳にも届いている。

「れ、玲奈…」

「あは、さすがあゆちゃんね、ネタ尽きないわねー」

「うっ、言いたくなかったのに…」

後半を机に突っ伏しながら歩美は項垂れた。

帰り道、四人は分かれ道で二手に別れる。

悠羅と玲奈、紗枝と歩美。

「じゃあ、ごちそうさまでした、また明日ね」

「ごちそうさまでした、また明日からよろしくね」

「ん、また明日な」

「じゃねー、二人とも」

紗枝と歩美が手を振って見送る形で二組は別れた。

二人が前を向いて歩き出した頃、歩美が紗枝の方を見ながら尋ねる。

「あの子が紗枝ちゃんの言ってた玲奈ちゃん？」

「うん、そうだよ」

「ふーん…ゆうくんは？」

「今は従弟かなあ」

「ふーん…大丈夫？」

「…あは、大丈夫だよ。さ、私たちも帰ろっか」

「…うん」

丁度玲奈と悠羅が見えなくなったところ、二人も反対方向に歩き出した。

Act・5 『お酒は二十歳になってから』

入学式から遅れること一週間。

無事、学校に来ることが出来るようになったと思えば今度は生徒指導の安井に目を付けられた。

そりゃ、ね、校内をローラースケートで走った私も多少は悪かったわよ。

でも別に人に迷惑掛けたわけでもないしちょっとくらい快気祝いに目を瞑ってくれてもいいでしょ。

しかも極め付け、あの安井のやつ、翌日校門前で私を待ち伏せした挙げ句、裏庭の草むしりまでさせたのよ！

マジ最悪。

まあ、紗枝ちゃんと玲奈ちゃんとゆうくんが手伝ってくれたから何とかなっただけだね。

あんな広いところ私一人で出来る分けないじゃない。

でも、紗枝ちゃんとは同じクラスだしゆうくんも玲奈ちゃんも変だけどいい人だし、担任のみなみちゃんはおもしろいしその辺はよかったかな。川瀬はクラス替えもよっぽとじゃないと無いっていうしね。

そんな四月もおわって五月になったある日、私と紗枝ちゃんと玲奈ちゃんという三人での食事が当たり前になったころ、唐突に紗枝ちゃんが云いだした。

「久しぶりに玲奈ちゃんのお家に行きたいなあ」

「うっ？」

玲奈ちゃんたらお弁当のミートボールを口に入れた状態で紗枝ちゃんの言葉に反応するもんだから巧く喋れてないし頬がハムスターみたいになってる。笑っちゃいけないけど笑えるよ…

玲奈ちゃんは紗枝ちゃんの小学校からのお友達で、存在だけは中学のとき紗枝ちゃんの話によく出ていたから知ってる。

確かに紗枝ちゃんの言っていたとおり素直で表情豊かだし、裏表ない感じだなあ。

「はいはい、玲奈ちゃん、まずは飲み込んでね」

「はあひ」

紗枝ちゃんが苦笑しながら玲奈ちゃんの面倒を見てる。

これが私の知る限りこの二人の日常。

「ん、飲み込んだよ。で、紗枝ちゃん家くるのー？」

「うん、行きたいなあって。今、玲香さんいないんだよね？」

「お父さんもないよー。わたしとゆんゆんとユウナさんだけ」

さらっと玲奈ちゃんは言ってるけど、私はこれ聞いたときびっくりした。

普通、若い男女置いて単身赴任にいつちやうかなあ。

いくらなんでも従姉弟は他人だよな。

「いつくる？うちはいつでもいいよ。あゆちゃんも来るよね？」

そう言って玲奈ちゃんが私に振ってくる。

私も玲奈ちゃん家には興味あるし、行ってみたい、うん。

「うん、私も行きたいー」

そう返事すると玲奈ちゃんが嬉しそうに笑う。素直だなあ。

「じゃあ、折角ゴールデンウィークも3、4、5と残ってるわけだし、泊りで来る？？」

「泊り？いいの？」

迷惑にならないかなあと尋ね返すと、玲奈ちゃんは二つ返事で肯定を返してくる。

「うんうん、ユウナさんもお飯作りがあるって喜ぶと思うよ」

そうそう、玲奈ちゃんのお弁当ってそのユウナさんっていうメイドさんが作ってるんだよね。

毎日、ほんと彩りよく美味しそうなもの。

ワインナーがたこになつてたり林檎がうさぎだったりで芸も細かい。

この間交換してもらった唐揚げなんかもう絶品だったなあ。

なんて私が考えてたら二人でお泊りの話が着々と進んでるみたい。

「じゃあ、明日でいい？」

玲奈ちゃんが私に聞いてくる。

明日かあ、うん、何も無い筈。

「うん、大丈夫だと思うよ」

私がそう返事すると玲奈ちゃんがすごく嬉しそうに笑う。

そんな風に歓迎されると嬉しいよね。

「じゃあ、ユウナさんに言っとくから、明日きてね♪楽しみっ」

「何の話？」

そこでゆうくんが姿を現した。

ゆうくんもお昼は男の子のお友達と食べてるんだけど、荷物を置きに私たちが借りてる席に戻ってきた。

「あ、ゆんゆん。紗枝ちゃんとあゆちゃんが明日泊りにくるのー」

「おお、楽しそうだな」

「でしょ」

玲奈ちゃんが嬉しそうにゆうくんに報告してる。

それはいいんだけど周りの目痛いよ…

ゆうくんって実はすごくもてる。

身長は170くらいかな、でもまだまだ成長期で伸びそうだし、髪は自毛で綺麗な赤みがあった茶色。顔も童顔だけどそれが甘く優しい感じに見せてるし、それに後何年かしたら絶対かなり格好よくなるよ。後、頭も良いんだよね。数学苦手らしいけど入学してすぐあった学力模試の校内順位も3位だったらしいし。ファンクラブとかっていうのも聞いたことある。

玲奈ちゃんとか私、紗枝ちゃんもいるせいか、ほとんどの女の子は近寄ってこないけどね。

あ、あと、二人が一緒に住んでるのは内緒みたい。

気の置けない間柄でしか知らないことらしいから、なんかそういう意味では私も仲間に扱われてるみたいで嬉しい。

「あゆ、来る途中で迷子になるなよ」

なんてゆうくんが笑いながら言ってくるから右ストレートをお見舞いしてやったら巧く入ってしまったってゆうくん悶絶ザマーミロ。次は左試してみようかな。

時間の経つのは早いもので、今日はもうお泊りの日でしかもここは玲奈ちゃん家の前。

結局初めての場所だし道知ってる紗枝ちゃんに案内してもらった。で、着いた先は想像していたよりも大きなお家。そりゃ、メイドさんいるくらいだから大きなお家なんだろうなとは思ってたよ。

でもこれは思っていたより大きい…。

呆気にとられた私の横で、慣れた手つきでチャイムを鳴らす紗枝ちゃん、そりゃ、紗枝ちゃんは何回も来てるんだろうなあ。

しばらくして、インターホンから声が聞こえた。

「どちら様ですか？」

独特な機械特有の音に交じって聞こえる澄んだ声。

「紗枝です。開けて貰えますか？」

ここ、門もしっかりしてるから普通に入れないんだよ。きっとセキユリティー万端でいつだったかのCMみたくセコムなんか入っていて長嶋さんくるんだろうなあ。

なんて考えてたら重みのある音をたてて門が開く。

うーわあ、こんなのテレビの中で見たことないよ…

「さ、いこうか」

紗枝ちゃんについて私も歩きだす。

門から玄関までがこんなに長いお家って本当にあるんだね…。

「紗枝ちゃん！あゆちゃん！」

玄関に近くなると中から玲奈ちゃんがひょっこり顔を出した。

「来たよ」

紗枝ちゃんが手振ってる。

「いらつしやい、さ、上がって」

玲奈ちゃんに促されるまま中に入ると、見知らぬ人物が立っていた。

この人が多分、ユウナさんかな、メイド服来てるし。

「いらつしやいませ、紗枝さま、歩美さま」

深々とお辞儀され、私も慌ててお辞儀を返す。

「あ、お世話になります…」

「ユウナさん、お久しぶりです」

紗枝ちゃんは慣れてるのか普通に挨拶しちゃってる。

「あの…名前普通に呼んでくれていいですよ…？」

さま付けがくすぐったくてそう云つと、ユウナさんが即座に顔を振った。

「いえ、私はメイドで、歩美さまは玲奈さまの大切なご友人ですから、折角ですが…」

む…恐るべきプロ根性ってやつね。

私は思わずじつとユウナさんを見てしまった。

ユウナさんって凄く整った顔してるの。

金髪碧眼、まるでフランス人みたい。

髪は肩上で綺麗に揃っていて、濃紺に赤いリボンのワンピースにオーソドックスな白いエプロンメイド服、頭にヘッドドレスまでついている。身長も高そう。

きつめの少し釣り上がった意志の強そうな瞳も、その綺麗な容姿にあつてる。

なんてまじまじと見ていたら、ユウナさんが首を傾げた。

「ご、ごめんなさい！」

慌てて謝ると、隣で玲奈ちゃんと紗枝ちゃんが笑ってる。

「ね、上がって」

玲奈ちゃんの言葉に促され、私と紗枝ちゃんはあらかじめ用意されていたスリッパを履いて長い廊下を歩く。

「お邪魔します〜」

あー、気軽な紗枝ちゃんが恨めしい。

階段に一番近い部屋に通されると、そこは居間らしく、ソファーにもたれてテレビを見ているゆうくんの姿が在った。

「あ、いらっしやい」

顔だけこつちに向けて挨拶を寄越す。

「来ちゃった、よろしくね」

紗枝ちゃんがそういつてゆうくんの近くのソファーに腰を下ろしたので、私もそれに倣った。

「あゆ、迷わなかったか？」

分かっているくせに言ってくるゆうくんが腹立つ。

につこり笑顔で左手を上げると、ゆうくんが青い顔で謝ってくる。ゆうくんには初対面であれだけ恥曝したし今更遠慮がないんだよねえ、不思議と。

「お飲み物をどうぞ」

綺麗なガラスのコップになみなみ注がれたオレンジジュースをユウナさんがストロー付きでコトンと軽い音を立てておいてくれる。

長い道程を歩いてきた私の喉にこれは有り難い。

喜んで喉を潤していると、またゆうくんがからかってくる。

「がぶがぶ飲んでるとお腹壊すぞ」

ゆうくんって慣れてくるとこどもっぽいとこあるんだよね。

飲み物で両手の塞がっている私は、足で隣のゆうくんの足背をぎゅつと踏み付けた。もちろん踏んだ後にぐりぐりと踵で二度踏みしめてやる。

「痛っ！」

悲痛な痛みの声にふんつと鼻を鳴らして私はまたストローを口に含んだ。

何でこんなのがもてるんだろ…皆だまされてる…。

紗枝ちゃんたちも、笑うくらいなら助けてくれればいいのに。

「ゆんゆん、口は災いのもとして言葉知ってる？」

「お前にだけは云われたくないぞ、それ…」

横でくすくす笑う玲奈ちゃんに、ゆうくんが一睨みするけど、玲奈ちゃんがそれくらいで動じるわけもなく、あっさり流すんだよね。
「今から何するー?」

今三時前だから、お夕飯にも時間あるし。

「んー、アレするか?」

「アレかぁ、いいね」

ゆうくと玲奈ちゃんが言ってるアレってなんだろう?

「ね、アレって何?」

そう尋ねると、ゆうくんがテレビの下から何かごそごそ出してくる。

…ファミコンとスーファミ?

今時って思うんだけど、二人ともやる気満々だよ。

「負けないよ! ゆんゆん!」

「負けたらバツゲームな」

うわ、もう止められなさそう…

紗枝ちゃんもすでにソフト漁ってるし…

なんて私が現状を遠めに見てると、チーム分けとかでグーパージヤンケンが始まっちゃったんだよね。

ユウナさんはやることあるらしく、結局私たち四人。

結果、玲奈ちゃんと紗枝ちゃん、私とゆうくんのペアになった。

「まずはファミコンでマリオ! 定番だよな!」

「おう、ゲームオーバーまでに1 - 2にある隠しステージとか使わずに通常ゴールでどこまでいけるか勝負な」

ああ…私苦手なのに…

しかも最初、一番手だよ。

泣く泣くコントローラーを握らされ、テレビの真前に座る。

懐かしい音とともにマリオが走りだす。

えーと、これでダッシュと…

たどたどしくも一面クリアしてほっとする。

それも束の間、次が待つてるんだよね、また軽快に走りだしたら…走りだしたら…最初の敵のキノコにぶつかって自爆…？

玲奈ちゃんと紗枝ちゃんはやきはきは笑うし、隣のゆうくんは無駄に叫んでるから八つ当りに「うるさいっ！」ってコントローラ―投げ付けてやった。

で、次は玲奈ちゃん、慣れた手つきで進めてる。しかも途中で1upキノコしっかり取ってるし。

「玲奈それずるい！」

「うっさい！1upはずるくないでしょ！」

玲奈ちゃん巧いなあ、1面で4つあるんだけど1-3の途中で滑って落ちるまでは1つと行っちゃった。

次はゆうくんだけど、ゆうくんも玲奈ちゃんに似た感じの動き、もつと慣れてるかな、そんな感じで快活劇を見せる。

1-4のボスまで倒しちゃったしね。

「さ、紗枝ちゃん…」

1upの強みとはいってもこんなにあっさり進められちゃうと玲奈ちゃんも弱気になって紗枝ちゃんに泣き付く。

けど紗枝ちゃんが一番凄かった。

「玲奈ちゃんの仇は取るからね」

その言葉通り、紗枝ちゃんは一度も死なずに1面のボス突破してつぎつぎ行く。

挙げ句、奥の手の無限upまで…これ結構しなれてないと出来ないんだよ、階段から落ちてくる亀を上手に踏むんだけどね。

結果は云わずと知れた惨敗。

玲奈ちゃんは紗枝ちゃんに抱きついて喜んでるし、ゆうくんは負けず嫌いらしくダメージ受けてる。

その後もファミコンのソフトをいくつか試してスーファミもやった。

マリオカートでゆうくんは水を得た魚のように玲奈ちゃんの狙うキノピオ先取りするわ、レースでマグマや水の中に玲奈ちゃん突き

落とすわでケタケタ笑ってた。

ほんと、学校とイメージ違うなあ。

そんな風に遊んでたらもう七時近くなって、丁度ユウナさんが夕飯の用意も出来たらしく呼びにきてくれたので一先ず手を止めることにする。

何時間もゲームって実際すると疲れるよね、楽しかったけど。

「ご飯〜ご飯〜」

玲奈ちゃんが嬉しそうに食卓に付く。

ここ、居間兼食場所みたいになってるんだよね。

ユウナさんの食事は本当に美味しかった。

玲奈ちゃんの好物らしく、今日はハンバーグとミモザサラダ、クラムチャウダーだった。

中でもデミグラスソースは絶品！しかもハンバーグの中にはとろっとしたチーズが入ってるんだよ。

食事は一緒に取るようにしてるらしく、ユウナさんを交えて五人で食べた。

ユウナさんは口のサイズに見合った大きさに綺麗に切って食べてるんだけど、不思議とペースが…気のせいかな？

「ユウナさん、細いのに割りと食べますよねえ」

紗枝ちゃんが感心したように零すと、少し頬を染めてユウナさんが手を止める。

それにしても美人って得だね、何しても様になるし変じゃないもん。

私と同じことしたら、きっとゆうくん辺りが笑うんだよ。あゝ考えたら腹立つ！

私は八つ当りと分かりつつゆうくんを睨んだ。

「何だよ」

視線に気付いたゆうくんが問い掛けてくるけど無視無視。

「おい」

黙ってハンバーグにパクツク。

「そうそう、ユウナさん聞いてよ」

そこで思い出したように玲奈ちゃんが口を開く。

「ゆんゆん、こないだあゆちゃんを校舎裏で押し倒してたんだよ」

実際は逆なのだが、その辺はどうでもよかったのだと思う。

玲奈ちゃんの言葉にぴくつとユウナさん反応してそのままゆうくんに視線を移す。

ゆうくんと一緒に私までびくつとなっちゃったよ…

「悠羅さま」

「はい…」

「不潔です」

「…」

美人が怒ると迫力あるなあ… ゆうくんはもう言い訳する気力もないみたいね、可哀相に。

ちよつと同情する…。

ユウナさんは今二人の保護者でもあるから色々責任もあるのかな。
「あの、それは私が下敷きにしちゃったせいでゆうくんが悪いんじゃないです…」

一応可哀相だしフォローしてあげることにする。

「そうなのですか？」

ユウナさんが私の話を聞いて確かめるようにゆうくんに尋ねてる。

「あ、うん…」

「そうですか。それなら良いことをしたわけですね、失礼しました」

「えー、ゆんゆん、そうだったの？」

そこでさも今知りましたとばかりに声を上げたのは玲奈ちゃん。

「何回も説明したたる…」

「そうだっけ？あはは」

最後のほうは笑って誤魔化す辺り、玲奈ちゃんもやるなあ。なんて考えてたら、ゆうくんがこっちを見てた。

「？なに？」

「あゆ、お前結構いい奴な」

何をいまさら。

「一食一飯の恩義よ、ハーゲンダッツ美味しかったしね」

「一宿一飯な」

素早い突っ込みに、やっぱり助けてやるんじゃないかと後悔したわ。

食事の後はユウナさん手作りのアイスを頂いて、順番にお風呂に入っていく。

お風呂から出たら冷たいポカリが出された。至れり尽くせりだね。ユウナさんいいなあ。

最後にユウナさんが入った所でお風呂も最後らしい。

私は上Ｔシャツに下ジャージ、ゆうくんも似たような格好つているのが微妙よね。

玲奈ちゃんは可愛いパジャマ着てるし、紗枝ちゃんも可愛いルームウェア着てる。私もパジャマ持ってくればよかったかなあ。でも動きやすいのがいいしね。

最後に出てきたユウナさんは、白のワンピースみたいなパジャマ？ルームウェアかな？何にしても、寝るときまでメイド服ではないんだね。

それにしてもゆうくん、女の子こんなに居て何も思わないのかなあ？

まあ、何かゆうくんって鈍そうではあるしね。

「あ、玲奈ちゃん、私が持ってきたお土産」

紗枝ちゃんが玲奈ちゃんにそれだけ云うと、玲奈ちゃんが頷いて台所に行つてすぐに戻ってきた。

何かいっぱい抱えてる。

ん…？耐ハイ？

「ちゃんと冷やしてるよ、家で用意してるのもあるしね」

いろんな種類の缶酎ハイとビール。

え？ビール？

「俺ビールな」

すつと中からお目当てのものを最初に見つけて取ったのはゆうくん。

「わたしカシス&オレンジ」

「んじゃ、私は梅のペリーラ」

「あー、紗枝ちゃんいいなあ、わたしそれも好き」

「ちゃんとまだあるからそれ飲んでから飲むといいよ」

紗枝ちゃんも玲奈ちゃんも呑む気満々…

「一応私たち未成年…」

なんて私の言葉が受け入れてもらえるはずはないわけで。

ユウナさんも、お酒は黙認しているのか何にも言わない。

「あゆ呑めないのか？子供だな」

ゆうくんがぐいつと一口呑んで私をからかってくるものだから、

私だって引けない。

「呑めるわよ！」

奪い取るように適当な缶酎ハイを手にとると、ぐいつと喉に流しこむ。

とたん、顔が赤くなり、視界がくらくらした。

顔や上の方だけ熱い…変な感じ。

でもなんか気分いいかも。

「お、あゆ、結構呑めるな」

なんてゆうくんが言うもんだから、益々呑んじゃう。

でも、不思議とお酒、苦手じゃないかも、気分いいけどそんなに酔った感じしないし。

後は普通にジュースでも呑む感覚で呑める。

でも、ユウナさんだけはなんかウーロン茶だけしか呑んでないんだよね。

何でだろ。

不思議に思つて聞いて見た。

「ユウナさんはどうして呑まないの？」

「ん？そういえばそうだな、ユウナさんが呑むとこ俺も見たことない。いつも風呂上りとかに玲奈とちよつと呑むくらいだしな」

ゆうくんも一緒になつて興味深そうにユウナさんを見てる。

つていうか、ゆうくん、玲奈ちゃん、あなたたち未成年でしょ…

「呑めないの？」

ゆうくんが聞くと、ユウナさんが首を傾げて見せた。

「いえ、呑んだことありませんので分かりませんが…」

控えめに答えるユウナさんに、紗枝ちゃんが新しい缶酎ハイを勧めた。

「ほらほら、折角楽しい席なんだから呑んだほうが楽しいよ、ユウナさん」

ほろ酔いで気分がいいのか、いつもより少しテンションの上がつた紗枝ちゃんが、ユウナさんを誘う。

いつもなら一緒になつて参加してる玲奈ちゃんが今日はただ見てるだけなのがちよつと変だなと思いつつ、私もユウナさんに勧めて見た。

ユウナさん、私たちより年上だし、強そうだしね。

「はあ…では、頂きます…」

やつと紗枝ちゃんの手から缶を取ったユウナさんが、口に酎ハイを運ぶ。

「はい、乾杯」

いつもより紗枝ちゃんテンション高いなあ、なんて思いつつ、私はユウナさんを見てた。

ユウナさんの喉元が動く。

何故か視線はユウナさんに釘付けになった。

ほら、お酒初めてな人がどんな風になるかってだれだって興味あるでしょ。

両手で缶を持ったまま動かないユウナさんに、ゆうくんが声かけ

る。

「…ユウナさん？」

途端、ユウナさんの肩が震えだす。

「え？」

驚いているのはゆうくんだけじゃない、多分その場にいた全員じゃないかな。

ユウナさん、笑い出しちゃった…

かと思ったら、突然ゆうくんの腕を引いた。

「ゆ、ユウナさん！？」

驚いているゆうくんとは正反対に、ユウナさんは艶やかな笑みを向ける。

色白い人が酔うとほんのりピンクで綺麗…なんて考えてる場合じゃない。

「悠羅さま…」

「ユウナさん…？」

もう、ゆうくん動揺しちゃって、さっきのお酒なんか抜けちゃってるみたい。

紗枝ちゃんも驚いてさっきのテンションなんか消えちゃってるし。

「あーあ」

今声を出したのは玲奈ちゃん。

皆がいつせいに玲奈ちゃんに視線を送る。

玲奈ちゃんも別段期にする風でもなく、自分の酎ハイを飲みつつ、柿の種を口に運んでる。

「玲奈…お前、ユウナさんがこうなるの知ってただろ」

「うん」

腕を拘束され動けないゆうくんの問い掛けに、玲奈ちゃんは普通に答える。

「何で言わないんだよ…」

「そのほうが面白いじゃん」

面白いつて玲奈ちゃん…

「あは、確かに面白いね」

え？紗枝ちゃんまで？さっき驚いてたのは誰！？

「でしょ、紗枝ちゃん。ユウナさん、今まで何回か呑んだことあるはずだよ。でもね、呑んだことすら起きたら忘れてるから本人呑むの初めてって毎回言ってるんだけどね」

「うーん、年上に迫られるゆうくんかぁ」

「助けて…」

困り果てて助けを求めるゆうくんだけど、誰も助けないんだよね。もちろん私も。

確かに見ていて面白いし、たまにはいつかなんて思い始める。

それにしてもユウナさん、酔うと人に絡むんだね…

困ったゆうくんがユウナさんからお酒を奪おうとすると、ユウナさんの表情が一変する。

「悠羅さま！」

「は、はい」

「お酒を取り上げて私だけ仲間はずれにするおつもりですか？！」

「い、いえ、そんなつもりでは…」

「どうせ私はただのメイド、同席して吞ませて頂こうなんて厚かましいですよ…」

今度は目に涙を溜めて泣き出した。

ユウナさん、女優になれるんじゃないかな…

そんなユウナさんとゆうくんを肴に、玲奈ちゃんと紗枝ちゃんは笑って二缶目開けてるし。

「あ、あゆ…」

「玲奈ちゃん、私ももう一本頂戴、今度はピーチがいいなあ」

助けを求めるゆうくんから身体を背け、私も一緒になって玲奈ちゃんたちに混ざる。

もう、こういうのは楽しんだもの勝ちだしね。

この後、数時間繰り広げられた宴会は、明け方まで及んだ。
残ったのは、女性陣四人の健やかな寝顔と、疲れきった上、片付けさせられる悠羅の姿だったとか。

Act・6 『その理由』

「ゆーたん」

今、悠羅を勝手な愛称で呼んだのは、隣のクラスの隆志である。最近、悠羅の周りに出没するようになった。

クラスで大体一人はいるはずだ、勉強はイマイチだが、体育祭と部活動では人が変わったようになる体育会系の人間が。

それがこの川口隆志である。

これまで、悠羅と隆志の節点は、ほとんどいつてないほどなかった。

別に仲が良いとか悪いとかではなく、ただ単純にクラスが違っていたので、節点がなかったのだ。

体育会系の隆志からみて、どちらかというと悠羅は興味の対象ではなかった。

悠羅も自分から友達をつくらうなんて性格ではないし、どちらかというとあまり口を開かない一見近寄り難いタイプである。

ただ、この二人はクラスでも対照的な存在として、良くも悪くも目立っていた。

隆志の方は、憎めない面白いキャラで、クラスでも皆から好かれている。部活のせいにか少し焼けた肌が健康的で同年代の平均身長よりも高い身長が隆志を余計に目立たせた。その上、その辺りの男子に比べるとどこか大人っぽく、顔も悪くない。サッカー部での活躍も大きく、一年にして実力でレギュラーを取ったことはすぐに知れ渡った。異性からもてる要素は十分であった。何より、同性からも一目置かれるような存在である。

対照的に悠羅は、積極性にかけていた。

『入学式に女連れで来た男』それが入学早々、最初に悠羅についた周囲への印象だった。

悠羅は、どちらかといえば、男子より女子に好かれる。

早々に、紗枝や歩美など、クラスでも可愛い部類に入る女の子たちと仲良くなっていたことが、また同性の男の子たちを遠のかせた。天然なのか、大物なのか、悠羅自身は男女の差をあまり意識せず付き会えるのである。

まだ成長段階の身長と、かつこいいというよりは、綺麗・可愛いと形容される美少年。

それが同性からの敬遠の対象だったのだ。

反対に異性においては、クラスの女子もそうだが、他の学年に密かなファンクラブまであるという噂である。

それでも、周囲から一目おかれる存在ということには代わりなく入学早々の学力テストで上位に入っていたことがそれだった。

川瀬は自由な校風が売りなのだが、同時にそれはある一定のラインの上に成り立つ。

学校の規定により、テスト結果は張り出すようになっていたので、悠羅の学力が皆に知れ渡るのは簡単なことだった。

だが、次第に悠羅の天然さと、玲奈たちに苦労させられている悠羅を見るうちに、クラスの目は変わってきた。

すぐに人に受け入れられる隆志とは違うが、少しずつ悠羅もクラスに馴染んで行ったのである。

陽と陰。動と静。

そのくらい、二人は周囲から見ても対照的だった。

そんな二人がどうして急に互いを認識しあったのか。

正しくは、隆志が悠羅に付きまとうようになったのか。

ことのはったんは1週間ほど前の体育の時間に遡る。

その日も隆志は午後の体育の時間を水を得た魚のように満喫していた。

午前中の退屈な授業はすべて寝ていたというのに、体育になると覚醒するらしい。

隆志の大好きなサッカーだったこともあるが、その日の隆志はとにかく気分も絶好調だった。

「おう、隆志、お前と同じチームで助かったよ」

1 - Bのクラスメイトが嬉しそうに隆志の肩を叩く。

「うん？なんだよ、佐々木」

試合前の軽いウォーミングアップを行っていた隆志は、クラスメイトのその声に反応して頭を上げる。

佐々木は同じ部活の仲間だった。

「この試合で勝った方が、来週の体育で野球とマラソン、好きなほう選べるらしいぜ」

「ああ、なるほど。マラソンは部活だけで十分だな」

意味を理解し、隆志が笑うと、佐々木も頷き笑った。

負ける気はないが、余計に試合が面白くなった。

きつと、1 - Aもそれなりに本気でかかってくるだろう。

例え遊びだろうと、勝負はそうでないと面白くない。

「部活前の準備運動だろうと思って頑張るか」

「そうだな、手抜くなよ。あっちにだっていい選手はいるんだからな」

佐々木の忠告に、隆志は口の端を上げて答える。

「俺とお前のコンビに適わないだろ？」

「…まーな」

この時の二人には、自分たちの勝利を確信があった。

試合開始のホイッスル。

1 - Bは隆志と佐々木がいることで余裕があった。

対照的に、1 - Aの面々は、それなりに緊張の面持ちがあった。

授業時間内での試合のため、公式ルールではなく、先生が用意したルールによって行われた。

各20分前後半線、休憩10分。

選手交代は5名まで可。

前半戦、予想外の粘りで、1 - Aは0 - 0留めた。

多少、授業だからと手を抜いていた隆志たちも、これには少々本気で行く必要があると判断した。

「佐々木、次、入れるぞ」

隆志の表情が変わる。

普段、不真面目な隆志がこういう表情をするときは本気の証拠だ。それを見て佐々木は苦笑する。

「隆志、ただの授業だろ」

「でも負けるのは悔しいだろ？」

「…同感だな」

二人はクラスメイトを集めると、前半戦のことを踏まえ、残り時間で作戦を立て直す。

ピーーーーーーッ

後半戦開始前の集合のホイッスル。

どちらのチームも何人かの選手交代があった。

日頃、運動部の人間でもないかぎり、20分全力疾走はきつい。もちろん隆志と佐々木は変わらずレギュラーだ。

A組も、サッカー部の人間はそのまま入れ代わりはなかった。

そして、いつの間にかギャラリーができていた。
クラスの女子たちだ。

上手く先生を丸め込んだのだろう。

周りの男子も女子の目があるからかやる気が上がる。
だが、隆志が気になるのは女子よりも悠羅だった。

どうやら後半から入るらしい。

相変わらずぼーっとしているのを、従姉の玲奈に殴られている。

周りの女子もきやあきやあと悠羅に声援を送っていた。

「隆志、何見てるんだ？…ああ、なんだ中込か」

佐々木が隆志の視線の先を辿る。

「まだ入学してまだ授業回数も少ないけど、俺、あいつが体育出る
の初めてみるなあ」

いきなり出てきて大丈夫なのかという風に、佐々木が呟く。

「…ま、どうせ勉強できるけどスポーツはダメなんじゃないか？だ
から休んでたんだろ。」

気を取り直したように、隆志が佐々木に目を戻す。

「だな」

佐々木も特にそのことは気にしていなかった。

休憩時間、後半戦も出る気がなく、ぼーっとクラスメイトの試合
を見学する悠羅のところに、何故か玲奈や紗枝が来た。

「どうやら、女子は男子の見学を許されたらしい。」

「ゆんゆん、やっと出る気になったんだね！単位足りなくなったら
どうするの！」

今日初めて体育に参加する悠羅に、玲奈が殴った後に叱りつける。
周りのクラスメイトは日常茶飯事のこの光景を笑いながら見物し
ている。

「だから出てるだろ…」

痛みの残る頭部を押さえながら、悠羅が玲奈を睨みつけた。

「今までだってどうせ運動音痴だから隠れてたんでしょ」

音痴と決め付けている玲奈に悠羅がむっとして返す。

「誰が音痴だよ」

「ゆんゆんに決まってるじゃん」

「おい、マラソン後ろから数えたほうが早いお前と一緒にするなよ」

「な、なんでしってるの！どこで見てたの！」

「本当なのか…」

どうやら、悠羅は適当なことを言っていたらしい。

言いたくもない事を誘導尋問された形になり、玲奈は逆恨みする。

「っゝ音痴じゃない証拠見せなさいよ！」

「嫌だ」

「何だよ」

「だるい」

「このお婆かー！」

やる気のない悠羅に玲奈が逆ギレする。

「まあまあ、玲奈ちゃん」

そこで、それまで話しに入ってこなかった紗枝が入ってきた。

そして、悠羅に笑顔を向ける。

「うう」

嫌な予感を多分に含んだ紗枝の笑顔に、悠羅が退く。

「今ね、男子にお願いして、後半戦、ゆうくん出られるようにしてもらっちゃった、あは」

その言葉に玲奈は手を叩き、歓喜を上げ、悠羅は表情を引きつらせた。

「いつのまに…」

そういいながらクラスの男子に視線を送ると、皆愉快そうに「だって、俺らも興味あるし、勝負は任せた」と悠羅と交代になる男子がぽんと肩を叩き答えてくる。

後は、玲奈やクラスの女子たちの声援に後押しされ、いやいやグ라운드に出る事になった。

ピー……………ッ

2回目のホイッスルは試合開始の合図。

互いのゴールをチェンジして、始まった後半戦の結果は、思いもよらないものだった。

後半10分でAチームが一点獲得した。

そのまま、守りきり、引き分けかと思われた試合だったが、ラスト2分で再びAチームがゴールを決めた。

「まじかよ…」

終了のホイッスルがなった後、隆志が呟く。

クラスの女子が集まって、「残念だったね」「部活じゃないもんね」などと慰めの声を掛けてくるが、そんなものは隆志の耳に入っていないかった。

「ゆんゆん～～！」

隆志の視界には、悠羅の元に向かう玲奈の姿が見える。

「ん……うわっ…！」

振り向く悠羅の顔に、玲奈の持っていたタオルが投げつけられた。

「勝ったね～～おめでと～～」

「ふん」

一瞥して、貰ったタオルで汗を拭く悠羅。

素っ気無い悠羅の態度に玲奈がむっとする。

「何その勝ち誇った態度！むかつく！大体なにその態度、全っ然っ可愛くない！」

「男が可愛いわけないだろ」

「ゆんゆんは可愛いじゃん、黙ってたら。ねえ？」

そう言っただけを見ると、皆うんうんと頷いて見せた。

「…お前とは違うからな」

「うわっ、むかつくっ！大体タオル何勝手に使ってるのよ！」

「お前が投げてよこしたんだろ」

「知らないわよそんなの！一点も入れられなかったくせに！」

「おい」

ふいに、二人のやり取りを見ていた隆志にタオルが投げられる。

「…サンキュ」

佐々木の投げてよこしたタオルで、隆志も汗を拭き始める。

「あのお嬢さん、分かってないよなあ」

負けたことを引きずっているのか、苦笑気味に隆志に話しかける佐々木。

「実際点を入れたのは他のやつだったけど、入るように的確なパスを持つていったのはあいつ、中込だよ。ただの勉強だけできるお人形さんじゃなかったんだなあ。天は二物も三物も与えるってか？あー、こんなことなら前半で点とつときや良かった」

最後の方はタオルで髪をぐしゃぐしゃに掻きながら言い切った。

「…でも、ま」

そこで隆志が佐々木の肩を叩く。

「フルの時間の試合なら俺たちが勝ってたさ」

それは、同時に自分への慰めでもある。

いつもの余裕ある笑いが、出来ず少し自嘲気味に笑う隆志の表情。あの時、後半、あの一点を取られてから、隆志も佐々木も本気でやっていた。

他の者たちが下手というわけではない。

だが、敗因は間違はなく、悠羅の存在だった。

他を抜いても必ずくいついてくる。的確なパス。

力で攻めていく自分とは違い。余裕のある無駄のない動き。

そんな相手だったからこそ、負けた悔しさが残る。

隆志の興味を奪う対象として、十分な理由を悠羅は持っていた。

「何度言われてもサッカー部には入らないからな」

目の前の隆志を一睨みしながら隆志が口を開く。

「俺まだ何も言っていないのに…」

「結局はそれ言いに来たんだろ？」

「あゝ、ばれてる？」

悪びれることなく笑う隆志に、悠羅が知らず知らず溜息をつくが、それにも隆志は動じることはない。

「毎日繰り返されてたらな…」

隆志がこりることのないやつだと分かっているからこそ、悠羅は敢えて隆志に対してこういう態度をとる。

机にいだらだと身体を預け、悠羅を見上げる隆志が今度は悠羅に尋ねる。

「なんでそんなに嫌なんだ？」

一瞬、表情を止めた後、もう一度悠羅は溜息をついた。故意的ではない溜息。

「…理由なんてないよ」

それに対して、隆志は何も言わず、ただ悠羅を見上げるだけだった。

「お前はなんで俺に構うんだ？」

悠羅が話題を代えた。

何それは何かを誤魔化すようでもあった。

「んゝ、俺え、サッカーバカなんだ」

「だろうな。」

「ゆうたんひどいなあ、そこは少しは肯定するところじゃないだろ…」

気に障った風でもなく、隆志は笑って続ける。

「で、この間のゆうたんのプレーみてさ、思ったんだよ。一緒にサ

サッカーしたいって。正直びっくりした、サッカー部でもないのにこんなに上手いやつこの学校にいたんだって。そう思ったら止まらなくなっ

「…甲斐被りすぎだよ」

曖昧に苦笑する悠羅に、隆志が珍しく真剣な面持ちで口を開く。

「いいや、俺バカだけど、こういう感？っていいんだよ。ゆうたん、昔サッカーしてただろ、学校の部活じゃない、ちゃんとしたクラブで。それにさ、俺、ゆうたんみたいなやつとサッカーしたいんだ」

「俺は…」

悠羅が何かをいいかけた時、丁度チャイムが鳴ったため、会話は中断される。

隆志は一息ついて笑いながらまた来ると去って行った。

帰宅途中。

悠羅と玲奈は肩を並べて二人で帰っていた。

ふいに、玲奈がくすくすと思いついたように笑い肩を揺らす。

「なんだよ」

「んー？」

横目で見てくる悠羅に意味深に視線を送る。

「隆志くんってさ、面白いよね」

「ただのバカだろ…」

悠羅が隆志の顔を思い出し、大きな溜息をつく、それを見てまた玲奈が笑う。

「ゆんゆんってさ、わたしとかにはバカとか平気で言うし、口は悪いし、ケタケタ笑うでしょ？」

「ケタケタなんか笑わないだろ…」

「モノの例えよ、聞きなさいっ。」

「…で？」

納得はしていないものの、先が気になるので悠羅は素直に従った。
「ん。でね。他の子が入学当時ゆんゆんのことなんて言ってたと思う？」

「何…」

「無口で更派、らしいよ」

「けほっ…何それ」

「だから、ゆんゆんのイメージでしょ？だって、ゆんゆん、自分から人の輪に参加しないし、人を寄せ付けないイメージもあるから。だから皆誤解しちゃうんだよ。まあ、今は皆ゆんゆんが本当は口が悪くて性格も悪いって分かってきてると思うけど？」

悪戯に笑いながら悠羅を見る。

「お前失礼だよな」

「本当のことじゃん。それにゆんゆん、どこか人を寄せ付けないイメージっていうの？そういうのはあったから」

「…」

ぶらぶらとカバンを振り回しながら歩く玲奈の横を、悠羅が黙って歩く。

「でもさ、隆志くんと話してるときのゆんゆんは素でしょ？いつもわたしや紗枝ちゃん、あゆちゃんみたいに周りに女の子ばかりだから、同年代の男の子でそういう親しい友達できて良かったじゃん。なんだかんだ言って隆志くんのこと気に入ってるんでしょ？それにゆんゆん、本当はサッカーやりたいんだよね」

「…なんでそう思うんだよ？」

「部屋にいっぱいサッカーのゲームとか雑誌とかあるし、部屋着がユニフォームだったり、何気にサッカーの番組はチェックしてるし、他の人にわかんなくても一緒に暮らしてるわたしには分かるよ、ゆんゆんが本当はサッカーが好きなことくらい」

「見るのが好きなんだよ」

「じゃあ、ジヨギングしてたりするのは何で？」

「…はあ」

悠羅が深く溜息をつく。

「何よ？」

「いや、別に？」

「ちゃんと言いなさいよ」

「お前って変なところで見てるっていつか勘いいよな」

「んゝ、褒めてる？」

「…さあ？」

にこにこ聞いてくる玲奈のおでこに悠羅がでこぴんを一ついれてやる。

「っ痛あ！」

パシッといい音がして、玲奈の額に少し赤い跡が付いた。

「なにするっ…」

「ダメなんだよ」

反撃に出ようとした玲奈の言葉を遮って、悠羅が口を開く。

「…何が？」

「サッカー」

「ふうん」

「ふうんって、それだけ…？」

「ん、だって、何か理由あるってことでしょ？言いたくないなら言わなくていいよ」

「そっか」

「うん。」

それっきり、二人は黙って帰路に付く。

翌日、いつもどおり悠羅の近くに腰を下ろしている隆志の姿が見られる。

「お前しつこいよなあ」

「俺、狙った子は逃がさないから」

「俺は女じゃねーよ」

「ゆうたんは、可愛いよ」

相手が女の子なら、頬を赤く染めそんな笑顔と台詞を見せた隆志に、悠羅が制裁を加える。

「暴力反対い・・・」

痛みの走った頭を抑え、涙目で隆志が訴える。

「お前が悪いんだろ」

「ほんとのこと言っただけなのに・・・」

「もう一発いるか？」

綺麗な笑顔で拳を上げた悠羅に、隆志が大きく顔を振った。

そんな隆志に苦笑を漏らし、一度溜息をつく、悠羅が口を開く。

「…なあ」

「ん？」

「俺、サッカー嫌いじゃないよ」

ぽつりぽつりと口から小さな声が紡がれる。

「うん」

隆志が分かっていると頷く。

「でも、出来ないんだ」

「何で？」

「それは・・・」

口ごもる悠羅を助けるように、隆志が尋ねる形で先を促す。

「身体悪いのか？体育も休んでたし」

「違うよ・・・」

「ふん」

「…だから、悪いけど諦めてくれ」

「やだ」

悠羅の頼みを、隆志は一言で振り払った。

「でも、ま、無理強いはいしないよ。俺ゆうたん好きだし、長期戦で落とす覚悟だし」

「落とすって…」

隆志がにっと笑顔を見せる。

「俺サッカー馬鹿なんだ」

「…知ってる」

悠羅が諦めたように溜息をついて、表情を崩した。

高く上る陽。

夏はもうすぐそこまで来ている。

Act・7 『二人きりの休日&let・前編>』

「いつてきまーす」

もうすぐ昼の12時が来ようとしているこの時分、やっと今頃になつて目が醒め、寝癖のついた後ろ髪を手で梳きながら2階の部屋から下りてきた悠羅は、玄関でめずらしく着飾ってスーツケースを持った玲奈と、それを見送るユウナに遭遇した。

「どこかいくの？」

欠伸混じりに尋ね聞いた問いに対する返答は、恨みの交じった冷たいものだった。

「…この間言つたでしょ、お母さんがお世話になつていたお友達の娘さんの結婚式があるから、私も良くしてもらつてる人だし今家にいないお母さんに代わつて出なきゃなの！わたしがせつかくの土曜日を削つて行くのにゆんゆんはそんないつまでも寝たりしてるし！」

「あー…忘れてた」

「この無関心」

「まあまあ」

「うーっ…まあ、いいや。お式14時からだし、受け付けもあるからわたしそろそろ行くね。車で30分くらいなんだけど夜には食事にも呼ばれてて、今晚もすでにそのホテル借りてくれてるらしいから折角の好意だし一泊してくるー」

「そっか、まあ、気を付けてな。変な人に付いていくなよ、あとそんなヒールはいてるけど倒けるなよ…」

そう云つて、悠羅は玲奈を改めて足元から上まで眺めた。

少しだけヒールのある白い靴に、膝丈程のオフホワイトのシンプルなワンピースには、胸元に造花の付いた揃いの上着が羽織られていて、首元にはクロスの小さなネックレスが飾られていた。頭は朝早く予約していた美容院でセットされ、ピンクの石の散ったアンティーク色の髪飾りで綺麗にアップされ、サイドには緩くカールし

た髪が残されている。年令にも合った清楚と云える服装は、年配の人にも好まれるに違いない。

「孫にも衣裳だな」

うんうんと頷く悠羅を一睨みしてから玲奈はスニーカーを引く。「たまには素直に誉めなさいよ！っていうか一言も二言も多い！んもう。じゃー今度こそいくね。ユウナさん、わたし急ぐし外まで見送り来なくて良いからねっ」

「分かりました。いつてらっしやいませ玲奈さま、お気を付けて下さいね」

玲奈はユウナに手を振って玄関を出ると、外に呼び付けておいたタクシーにすぐに乗り込んで出発してしまう。

あとに残された悠羅は、急に静かになった家に若干の淋しさを感じた。

「えーっと」

目を泳がせ、靴箱の上に置物として置かれた時計を見ると、時間を認識してしまい、空腹に見回れてきた。

「昼食のご用意はできておりますが…」

察したのか、ユウナが口を開き悠羅を見た。

「ほんと？じゃあ、食べたい…です…」

こんな時間に起きてきた挙げ句ご飯を求めることにはつの悪さを感じ、ついつい悠羅は敬語になってしまう。

「分かりました、すぐにご用意致しますので椅子に掛けてお待ち下さい」

ユウナは云うと、きびすを返して台所に向かった。

あとを追うように悠羅も付いていく。

そこで改めてこうやって長い時間をユウナと二人きりになるのは初めてであることを意識した。いつもはユウナが働いていても玲奈が居るから特に気にせず二人でテレビでも見ながら居ることが多く、こうやってユウナと長く一緒にいることになるのは引越してから初めてのことになるのである。

席に付いて待っていると、5分も待たずして湯気の立つ食器を乗せたトレイをユウナが目の前に置いた。

ふんわりとした卵の乗った親子丼と、白身魚の沈んだお吸い物、付け合わせに三色の漬物が綺麗に並べられている。

「いただきます…」

悠羅が手を合わせ箸を取ると、ユウナは湯呑みに日本茶を煎れ始める。

「ユウナさん、ご飯は？」

コトつと音をたて、置かれた湯呑みを受け取りながら悠羅が尋ねると。

「すみません、先程玲奈さまとご一緒に頂いておりました…」

「あ、いや、こんな時間まで寝ていた俺が悪いんだし。食べてるならいいんだ」

悠羅が再び箸を付け、食べ始めると、ユウナは自分の分もお茶を用意していつもは玲奈が座っている悠羅の目の前の席にストンと腰を下ろした。

「私も少し休憩します」

そういつてぱりつと煎餅を口に含む。

部屋で一人で食べるのは味気ないけれど、こうして一緒に誰かいるだけでも全然違う。

一月程前までの、一人でテレビを見ながら食べていたあの生活が嘘みたいな話で、最近はずっと食事中も誰かいたから、テレビを見るよりは話している時間のほうが長かった。

今はこうして誰かいて、暖かい食事も用意され、夜は明かりのついた家に帰ることができる。

いつのまにかこの生活に馴染んでいたが、そうしてくれているのはユウナで、改めて感謝しなければならなかった。

「ユウナさんは、ずっとここにいるの？」

一緒に暮らし始めて一月と少し。自分は彼女のことをほとんど知らない。いつも食事をしていても玲奈と学校のこととかを話すことが多いし、ユウナはそれに相づちしたりたまに少し口を開くくらいだからだ。玲奈とは話している姿をよく見るが、自分自身はまだあまり話せていなかったことに気付く。

「…はい。先代の頃からですから、もう長くお世話になっております」

蒼い瞳が悠羅に向けられる。

何を考えているのか分からないくらいに底の見えない深い深い蒼い瞳。

「そんなに…。ユウナさんは今いくつなの？」

尋ねられ、一度長い睫毛を伏せた後、再び目を開き悠羅のほうを見、首を左右に振った。顔には悲しそうな笑顔をのせ。

「分かりません」

「分からないの…？」

「はい。年は多分…20くらいでないかと思います」

「どうして…」

「私は自分の両親の顔さえ覚えてはいないので…」

口の端を上げて笑みをつくっている筈なのにその目には淋しさが隠せてはいない。

「ごめん…」

「いえ…聞いて下さって結構ですよ。これから何かあったら聞いてください」

そういつて気遣わしそうに笑うユウナを見ると、胸が痛む。

昔の自分なら他人のことなんか気にせず生きていて、誰かのことを詮索しようなんてことはしなかっただろう。

一度も家族が欲しいと思ったことがないという嘘になる。小学校の参観日、運動会、懇談会。いつも誰も現われない生活に淋しさを覚えたときも合った。

だが、そんな生活も次第に慣れ、年を取るうちに諦めという言葉

を覚えた。

どうせ手に入らないのなら望むだけ無駄なこと。

そうして生きてきた自分にいきなり与えられたこの家。

未だに戸惑うことがないと言えは嘘になる。

正直、どう接すればいいのか分からないときが多い。

玲奈は自分も家族だと言うけれど、やはり、どこか違うと思う。

一歩引いている自分がそこにいるのが分かるから。

「ユウナさんは少し俺と似てるね…。俺は父さんもいるけど、もう何年も顔も見えていないし、母さんの写真も見たことないから…」

「達也さまはお仕事が…」

「いくら仕事でも、休みくらいあるよ。父さんは俺と会う気がないだけだから」

否定しようと口を開くユウナに、今度は悠羅が苦笑した。

「でも、別にそのことはいいんだ。俺が今ここに居られるのは父さんが居るからだし、今ここに居られて、ユウナさんや玲奈と一緒に居られて良かったと思ってるし」

「悠羅さま…」

「…うまく云えないけど、血の繋がりがだけが家族とは思わないし、ユウナさんも俺や玲奈にとってはお姉さんみたいな存在だから…」
伺うように表情を見ると、そこには微笑むユウナの顔があった。

「…ありがとうございます」

一日、ユウナさんを見ていて気付いたコトがある。

まず、彼女は働きものだ。

普段から面倒を見てもらっているから分かつてはいたことだけど、こうして居間で忙しく行ったり来たりしている姿を目のあたりにすると、改めて認識させられる。

まず、あれから彼女は食べた食器を綺麗に片付けた。そして居間を中心に各部屋に掃除機を掛けていった。その後で干していた洗濯物を取り込む。学校のシャツなどにはきっちりアイロンがあたり、皺一つない。洗うのがめんどそうな女物の玲奈の服も、ネットを使ったり、手洗いにしたり、日乾しにしたりと指定に合わせて個別に行っているらしい。

する事がないので洗濯物を畳むのを手伝うことを買って出る。

断られるかとも思ったけど、案外あっさり彼女はお礼を言う場所を作ってくれた。

長い間一人で生活していたから、家事全般は苦手ではない。

「玲奈って家事出来るのかな…」

洗濯物を畳みながら、ふとそんな疑問が頭によぎる。

自分の見てきた玲奈の姿というと、大体が自分と一緒にテレビを見ているかどうかで、家事をやっている姿なんかは食事後の洗い物がせいぜいと言ったところ。

「玲奈さまですか？出来ますよ」

「あいつが？」

「まあ…悠羅さまがそう仰られるのも無理はないですが、幼少のころから玲香さまがしつけと言われて食器洗いから洗濯、食事の用意と私たちメイドに紛れてされていましたから。一通りは出来るかと思えます。最近は玲香さまがいらっしゃらないのでされていませんね」

「要するにさぼり…」

「本来、こういったことは私、メイドの仕事ですから、その方が有り難いです。しつけと言われれば仕方ないですけど…」

そう言って苦笑するユウナの脳裏には、まだこの家に玲香がいたころの二人のやりとりが思い出されていた。

「ユウナさんはこういう事を誰に教えてもらったの？」

こういう事とはもちろん家事一般である。

紅茶と手作りと思われるクッキーを運んで来てくれたときについてに問い掛けてみた。

「私がこの家に使える以前から、先に使える方々が居ましたから、その方々に育てて頂きました」

「え…この家はほかにメイドさんいたの…？」

確かにこの家は近隣の家に比べて大きいし、使用人の一人、二人は居ておかしくはないが、“方々”という限りはもっと大勢いたのだろう。それにしてもこの家は小さい。

「悠羅さまは何もご存じないのですね…」

「う、うん」

「では…少し昔話をしましょうか」

ユウナは悠羅の近くのソファ―に腰を下ろした。

「悠羅さま、葉月という家はこの辺りでは名の通った家柄なんです。今は亡き先代の当主がご健在でいらしたところには、この家には20人程のメイドや、執事も居ました。」

「メイドに執事…」

「この家は、先代が亡くなられた時に縮小し立て替えられたのです。ですから家の面積に比べて庭が大きいのです。」

「えと、じゃあ、今の当主は玲奈の父さんってこと？」

「いえ。葉月は玲香さまが継いでます」

「…？父さんは叔母さんの弟じゃなかったっけ…」

「少し難しいですが、葉月には中込という分家がありまして、達也さまはそちらの姓をお継ぎになられているのです」

分家？ 本家？

悠羅はいきなりの話に混乱しはじめの思考をまとめようとする。

「本来、世間では男性が家長を継ぐと云われていますが、葉月の家は第一子が継ぐとされてきました。ですから、達也さまが産まれる以前から、玲香さまが後継ぎと決められていたのです。分家である中込は、お世継に恵まれず、血筋を絶やさぬよう、達也さまが継ぐ

ことになったのです」

「な、なんかすごいね…要するに叔母さんが本家である葉月を継いで、父さんが分家である中込を継いだってこと？」

「はい、そうです」

自分の分のカップに紅茶を注ぎ、一口、口をつけながらユウナが頷いた。

「じゃあ、その、前当主は俺の血の繋がった祖父母になるのかな…会ったことはないけど…どんな人だった？」

「そうですね…前御当主は男性でしたから、悠羅さまのお祖父様になりますね。とても…厳格な方でした。それで良く玲香さまと喧嘩もされていましたね」

「なんか、凄そうだね…」

まだ片手ほどしか会ったことない叔母だが、それだけでも叔母の持つそこはかとない恐ろしさは手に取れた。

「奥様、悠羅さまからいますとお祖母様はとても綺麗な方でした。玲香様も、達也様も慕われておりましたよ」

「そうなんだ、お祖母ちゃんには会って見たかったかも」

「お二人とも、早くに亡くなられていますから、今の悠羅さまと玲奈さまを見られると、喜ばれると思います」

そう言ってユウナが微笑む。

「…父さんは、何も話してくれないから、全然知らなかったよ」

「達也さまには、達也さまのご事情が…」

「父さんに事情が？」

庇おうと口を開くユウナを、悠羅が見た。

「息子を何年も放つとくほどの事情があるなら知りたいよ」

ユウナははつとする。そこには、いつもの悠羅からは想像の付かないような冷たい目があった。

「…悠羅さまは、達也さまをお嫌いですか…？」

ユウナが恐る恐る尋ねると、悠羅はいつもどおりの表情に戻って、首を振った。

「いや。人が人を嫌うのは理由があるよね。俺は嫌うほどの理由も持ってはいないし、毎月口座に金を振り込んでくれたり、今行っている高校の高い学費も負担してくれていることに感謝はしてるよ」

「ユウナさん、もう一つだけ聞いていいかな」

もう、悠羅の表情は戻っていた。

すまなそうに自分の表情を伺うユウナに苦笑して笑んでみせる。

「はい、何でしょう？」

「俺の母さんは、どんな人だった？」

「悠羅さまの…」

そこでユウナは口ごもった。

まさかそんな質問が来るとは思っていなかったのか、表情が凍ったのが分かる。

「ユウナさん…？俺、何か悪いこと聞いた…？」

たいしたことを聞いたつもりではなかったのだが、明らかに一変したユウナの表情に、悠羅が動揺する。

「いえ…」

「いや、あの、無理にはいいよ…ただちょっと聞いてみたかっただけだから…」

「私も詳しくは存じておりませんが、ユーラさまも、凜として、強く、お綺麗な方でした…」

「ユーラ…？母さんの名前？」

「はい。悠羅さまの御名前は、ユーラさまがつけられたそうです」
「紛らわしい…」

自分と同じ名前を子供に付ける母を想像し、悠羅は溜息を付く。

「母さんは、死んでるんだよね。昔、うちで働いていた家政婦さんに聞いたら、母さんはもういないって聞かされたから。名前が形見になるのかな」

そういつて、悠羅は笑う。

死んでいると聞かされていた母親のことを、少しでも聞けただけ

で満足したのだろう。

「ごめんね、俺、母さんが死んでるのは知ってるし、気を使わせるつもりはなかったから」

先ほど、ユウナが口をつぐんだのは自分に気を遣ったことだと思っただけ、悠羅は、笑ってユウナを見た。

ユウナはまだ表情が硬い。

「そろそろ晩御飯だね。買い物行ってる？」
気を紛らわすように悠羅がユウナに尋ねた。

「あ…いえ、まだです」

「じゃあ、一緒に行こうか、たまには荷物持つよ」

そういつて、悠羅はソファから起き上がる。

慌ててユウナも後に続いた。

Act・8 『二人きりの休日&let・後編>』

出かける準備をしてくると云ったユウナを悠羅は玄関口で先に靴を履いて待っていた。

財布を取ったらずぐに来るだろうと思いそうして待っていたのだが、予想に反してユウナが現われたのは5分後だった。

「すみません、お待たせしました」

パタパタと軽い足音を立て、足早に近寄るユウナを振り返り、視界に捕らえた悠羅は驚いた。

目にした彼女が、いつものメイド服ではなく、裾の方に黒い蝶のプリントの入ったオフホワイトのさらっとした生地のスリーツスカート、上にはレースをあしらった流行のキャミソール、その上にカーディガンを羽織っているといった、普段からは想像つかないような服装に変わっていたからだ。

「どうかなさいましたか？」

ローヒールのパンプスを履きながら、同じ位置まで歩いてきたユウナが立ち止まったままの悠羅を不思議に思い、小首を傾げて覗きみた。

悠羅より低いとは云え、さほど目線の変わらない彼女の身長は、きつと165センチはあるだろう。

「いや…メイド服じゃないの…？」

どうやら目の前の相手は外出するときも自分がメイド服を着用していると思っているらしい。

ユウナは嘆息して悠羅を見た。

「悠羅さま、今時、メイド服で外を出歩いていたら目立ちますよ」

「う、うん」

「それに、誤解のないように云っておきますがメイド服を家で着ているのは私の趣味でなく玲香さまのご趣味です」

「え…そうなの…？」

心底驚いているといった風な悠羅を見て、ユウナはため息を付き、自分の心配が杞憂でなかったことを確信する。

「俺、てつきり、ユウナさんの趣味かと…」

「悠羅さま」

キツとユウナがその切れ長の目尻を釣り上げて悠羅を見上げた。

「は、はいっ」

あまりの迫力に思わず悠羅は萎縮してその場で姿勢を正してしま
う。

「いくら世情に疎い私でも世間一般で変かどうかくらい分かります
言い切るユウナの言葉で分かったことは、他の誰でもなく彼女自
身が玲香の趣味を変だと思っているということ。

「じゃあ、嫌々着させられてるんだ…」

気の毒にと彼女を哀れみかけたたん、彼女はうつむきがちに顔
を赤くして声を小さく呟いた。

「い、いえ、そんな嫌々というわけでは…」

「え…？」

「確かに外で試着する分にはおかしいと思いますが室内では画期的
といえますか動きやすいですし…デザインも玲香さまがオーダーメ
イドで拵えてくださっておりますので…」

どうやら彼女は世間一般で変とは分かってはいるが、彼女自身は
その服を嫌っているわけではないらしい。

「気に入ってるんだね…」

呟くように云った悠羅の言葉に、彼女は赤い顔を上げて上目遣い
に口を開く。

「へ、変でしょうか…？」

白い肌に気恥ずかしさから紅葉させた頬。

今にも泣きだしそうな目を向けて問うてくる彼女を目の前にして、
だれが変だと云えるだろうか。

「うつん。ユウナさんに良く似合ってると思うよ」

悠羅も例外ではなくあっさりと否定した。

「本当ですか…?」

「うん」

云ってからしまったと思わなかったと云えば嘘になるが、彼女の着ているメイド服と呼ばれるそれは、世間で持て囃されているようなものとは違い、生地のもともとも良いため、安っぽいサテン生地などを使った、俗に云うようなコスプレっぽさは無い。彼女の身体に合わせて作られたであろうそれは、浮くことなくよく馴染んでいる。玲香がオーダーメイドで作らせているというだけはある、とても彼女に似合っていた。

だから、近年街で見かける一部の女性達が着ているようなどこか浮いた着こなしとは違うのは。

「じゃあ、今の服がユウナさんの普段着?」

「はい…あまり日頃から外に出ませんのでそれほど数は必要ないのですが、こっちは玲奈さまが中学に上がられたくらいから見立てて下さるようになっていきます…その中から私が組み合わせて見たんですけど変ですか?」

普段着を着ていて変かどうかもないと思うのだが、悠羅がじっと見てきたので気恥ずかしさからユウナが尋ね聞いた。

「ん? いや、良いと思うよ」

「一応、悠羅さまと並んで歩いてもおかしくないように選んだつもりです…」

軽く微笑んで思ったことを素直に口に出しているユウナに、思わず悠羅の方が赤くなる。

「いや、俺、普通に黒のシャツだよ…?」

悠羅はズボンから出しているシャツの裾を摘んで見せた。

「くすくす。違いますよ、悠羅さま」

ユウナが口元に手をやって可笑しそうに笑った。

「悠羅さまはどんな格好されていても目立ちますから。」

どっという意味だろうかと首を捻り考えていると、ユウナがさっさとドアを開けて外に出ることを促してきた。

慌てて悠羅も外に出ると、ユウナが鍵をかけ、一度引いて確かめた。

確認が終わるとどちらからともなく歩きだす。

もうすぐ夏が来ようかと云うこの季節、木には青葉がつきはじめていて、程よい木陰が心地よい。

一月ほど前に通った時は薄桃色の世界があつた桜並木には、今は青葉が生い茂っていた。

「ユウナさんは夏好き？」

歩きながら、何か話題は無いかと考え、ふと思い浮かんだことを尋ねてみる。

「夏ですか？嫌いではないですね。洗濯物もよく乾きますし」

「洗濯物…ははっ、ユウナさんらしいね」

ユウナの答えにしばし笑った後、顔を赤くして睨んでくる彼女に、ごめんと何度か謝り、それでも出てくる笑いを押さえながら悠羅が口を開く。

「あー、おかしかった」

ひとしきり笑った後、満足したのか悠羅はユウナを見た。

「ゆ、悠羅さまはどうなのですか」

照れ隠しに尋ねてくるユウナの問いに悠羅は空を見て考えた。

「あー、俺は嫌いかも。」

「どうしてですか？」

「だって夏は暑いし、去年の夏はずっとクーラー付けて家に居たしなあ」

「じゃあ一昨年の夏は何されてたんですか？」

「一昨年は俺、サッカーしてたからずっと練習だったかな…」

「サッカーですか。そういうえはお好きでしたよね。今はもうされないんですか？」

「あー…うん…」

ふと先日、隆志にサッカー部への入部を誘われたときのことを思い出す。

あの時の体育のサッカーだって、紗絵が余計なことさえしなければ出るつもりなんかなかったのだ。

私立だけあって川瀬のサッカーグラウンドは公式に近く作られていた。

それが余計に昔の記憶を、感覚を蘇らせた。

忘れてかけていたあのボールの感触。フィールドに立った時の不思議な昂揚感。

全ては過去として忘れかけていたものだったのだ。そう、忘れられた筈だった…。

「残念ですね。悠羅さまがサッカーしている姿拝見したかったです。」

「

悠羅の心情を知らないユウナはただ残念と云わんばかりに呟いた。「そんなに期待するほどのものでも無かったよ」

心底残念そうにするユウナに苦笑する。

「それに、サッカーはするより見る方がもとと好きなんだよ。戦略とか考えるの好きだし監督向きなんだと思う」

悠羅は笑って自ら過去に関するその話を終わらせた。

「そうなんですか…」

ユウナはまだ納得はしていないようだがそれ以上突っ込んでくることはなかった。

彼女のそういった性格は有り難いと思う。

「それでさ、折角だしたまには外でご飯食べない？」

「外食ですか？」

「うん。ユウナさんの料理も美味しいから好きだけど、折角お洒落してくれてるし、たまには休んでさ。ダメ？」

「いえ、ダメということはありませんけれど…」

「じゃあ、いい？」

念押しに尋ねると少し考えてくくと頷いた。

「よかった。ユウナさん何食べたい？」

「そうですね、悠羅さまのお好きなものでいいです」

考えることなくそう答えた。

それがまた彼女らしいと悠羅は苦笑する。

「だめだよ。ユウナさんに聞いているんだから」

「ですが…私も外で食べる機会は今中々ありませんし、よく知らない
ので…」

「うーん、そつかあ。じゃあ、何かこれが食べたいっていうのは？」
「そうですね…」

話ながら歩いていったのだが、そろそろ街中に近くなる。

住宅街を抜けた先には、そこそこの規模の商店街が位置していた。
ユウナはきよるきよると辺りを見渡しめばしいものを探す。

ふと、彼女の視線がとある所で止まった。

それに気付いた悠羅が彼女の視線を辿ると、そこにあつたのは通
常の全国チェーンのどこにでもあるハンバーガーショップ。

赤字に黄色のMというロゴは至る所でみることができるであろう。

「え？ハンバーガー？」

まさかと思って尋ねるが、否定はない。

彼女の目は明らかにそれを見ていた。

「ハンバーガーが食べたいの？」

覗き見るように尋ねると、慌てて首を振る。

「い、いえ、決してそういうわけでは」

慌てて否定するがそれも説得力はない。

「ただ、最近あまり食べる機会がなかったの…」

確かに、ユウナさんは自分でご飯も作れるし、わざわざハンバー
ガーを買うこともないのだろうなと納得する。

「じゃあ、ここで食べようか」

「ですが…」

「俺も最近こんなところ来てないし、たまには食べるのも悪くない
よ」

そついつて悠羅は中へとユウナを促した。

「すいません…」

完全には納得しきっていないのか、歯切れの悪いユウナだが、中に入り、メニューを差し出されると、食い入るようにそれを見つめた。

「いらっしゃいませー」

定員の声も届いているのかいないのか。

視線の先を「何にする？」

隣から聞き尋ねると、やっとメニューから顔を上げ、こちらを見てきた。

「いえ、これなんかは、最近、期間限定だとテレビのコマーシャルでしていました…」

「あー。お月見バーガー？」

「はい、普通の照り焼きバーガーの上に卵がついて同じお値段とは、お得だと思います」

「んー、じゃあ、それにする？」

そう尋ねるが、今度は返事が帰って来ない。

視線の先を探ると、今度は別のメニューがあった。

「チーズバーガー？」

これも古くからある親しまれてきたものだ。

「以前、食べたときに美味しかったので…」

どうやら、彼女はその二つで葛藤しているらしい。

先ほどからその二つを視線が行ったりきたりしている。

「二つとも頼んだら？」

そう提案すると、彼女は慌てて首を振った。

「そんな、二つもだなんて…」

「食べ切れなかったら持つて帰ればいいと思うよ。ね？」

そういうと、少し考えた後、こくりと頷いた。

それを合図に、悠羅は手早く注文を済ますと、希望の飲み物だけを聞いてさっさと会計を終え、順番待ちのプレートを手にも、空いている席を捜し始めた。

適当な席が見つかったので、向かい合わせにお互い座って落ち着

く。

悠羅が食べやすいように、プレートの上のポテトとハンバーガーを置き方を変えて目の前に置いてやる。

「さ、食べようか」

促され、ユウナは照り焼きバーガーを慎重に持つと包み紙を広げていく。

その様子があまりにも面白いので、適当にアイス珈琲のストローを咥えながら悠羅は眺めていた。

はむ

一口、頬張ると、味を確かめるようにもぐもぐと咀嚼する。

「美味しい？」

尋ねると、彼女はこくこくと頷いてゆっくりと嚥下した。

「はい。すごく。。。」

「くす」

悠羅が笑ってユウナの頬に手を持って行った。

その動作があまりにも自然で、ユウナは身動きが取れなかった。

「付いてるよ」

親指で頬を拭われて、そこにソースが付いていたことを知らされる。

「あ、、すみません、、」

何が恥ずかしいのかも分からないけれど、きっと自分の顔は今赤いのだろうと思う。

そして何より、拭ったソースをそのまま舐める動作に余計に顔が赤らんでいく。

「うわ、甘いね…」

当の本人はそんなことは特に気にもとめていないのか、想像以上のソースの甘さに顔を顰めた。

「悠羅さまは、このソースお嫌いですか…？」

「うーん、ソースとかケチャップって苦手かなあ…」

初めて聞いた悠羅の好き嫌い。

普段、自分が何を作っても決して残すことなく食べてくれるから、
てつきり嫌いなものなどないと思っていたのに。

「そうなんですか…私、何度か食事に使ってしまった…」

知らなかったこととは言え、知らずに出してしまっていた事が心
苦しい。

「あ、いや、悠羅さんのご飯は美味しいし、好き嫌いある俺が悪い
んだよ」

「ですが、ソース類は調味料ですし、別段使用しなければいけない
ものでもないの、今度から控えますね」

そう言つと、悠羅は苦笑した。

「うん、じゃあ、そうしてくれると助かるかも」

「他にも何かありますか？」

「他？うーん…レタスとか？」

「野菜は身体のために必要です」

「あはは、言うと思った。」

「ですが、調理には気を付けます。」

「何か俺、小学生みたいだね…」

困った風に笑う悠羅に、ユウナが笑ってしまう。

その後は、食事をしながら、他愛無い会話で過ごす事が出来た。

食べ終えた後、すぐに帰るのも勿体ないので、商店街をぶらぶら
と一緒に詮索する事にする。

「ゲームセンターでもいく？」

誘われて、行った事がないというと、悠羅は目を見開いて驚いた。

「ゲームセンターも行ったことないの？」

「はい…怖い場所ではないのですか？」

噂で聞くゲームセンターは、不良のたまり場で、ユウナはどうも
敬遠していたらしい。

「うーん、あんまり夜遅くにいくと、危ないけど、これくらいの時
間なら平気だと思うよ。それにきつと楽しいよ」

そう言つて、悠羅が迷うユウナの手を引いて中に入った。

入る前から分かっていた賑やかな機械音は、自動ドアをくぐって中に入った途端に勢い良く鼓膜を振動させる。

同時に、目に入ってくるゲームのガラスの中の景品には、可愛らしいぬいぐるみや、小物があって、ユウナは目を輝かせた。

「ね？」

隣で笑う悠羅に、こくこくと頷いて見せた。

中をぶらりと詮索しようと言うことで、変わらず悠羅に手を引かれ、ユウナはあるいていた。

男の人と手を繋いで歩くななんて経験はもちろん彼女にはなく、握っている手が熱く感じる。

一巡して、入り口のクレーンゲーム辺りに戻るところには、耳も、この騒ぎに慣れてきた。

「何か取ってあげようか」

振り返り、悠羅が尋ねてきた。

「え……」

「ここの中のは景品だから、ゲームで取れば貰えるよ」

「そうなんですか」

そう言われ、きよろきよろと辺りを見渡してみる。

「あ……」

気になった先にあつたのは、商品にもなっている今話題のキャラクターのマスコットだ。

「ほえほえ……？」

大きく書かれた商品名を呟いて、悠羅は眉を寄せた。

インターネット上で良く見る、俗に言う顔文字を、白いふわふわとしたクッションに貼り付けているだけの商品だ。

最近、こんなものにも価値が付くのかと、少々呆れてしまう。

「これ、最近良く見るキャラクターです。しかも、限定版ですね。通常のより大きいです。ゲームセンターにはこんなものもあるのですか……」

磨かれたクレーンゲームのガラスに手を当て、中を見ている彼女

の表情は、ガラス越しにもとても嬉しそうで。

「ユウナさん、これがほしいの？」

「い、いえ、欲しいといえますか…可愛いと思いませんか？」

そう上目に聞いてくる彼女に、先ほど自分が思ったことなど伝えられるはずもなく、「可愛いね」と言ってしまう。

「じゃあ、これ取るうか」

そう言つて、彼女に避けて貰い、コインをゲーム機に入れる。

ちゃらんつと可愛らしい音を立て、クレーンが動く状態になった。

「どれがいい？」

微妙に色や形が違う物の中で、彼女が欲しいモノを尋ねると、すまなそうに彼女はピンクのそれを指差した。

「ああ、それならすぐ取れるかな」

言葉どおり、コイン3枚ほどで、それは取れた。

下の景品口から取り出して、隣のユウナに渡してやる。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます！」

嬉しそうに受け取るユウナを見れたので、取ったかいがあったと悠羅は思う。

「それ、気持ち良さそうだね。手触りはよかった」

「悠羅さま、使いますか？」

「いや、それは…」

手触りが良かったけれど、どうもその上に乗っている顔文字が悠羅は好きにはなれなかったので、丁重に断った。

その後は、近くの店を覗き見たりして、九時くらいに帰路についた。

帰る途中も、嬉しそうにそれを胸に抱えて抱き締めている彼女に自然と笑みがこぼれる。

「そんなに気に入った？」

そう尋ねると、いつになく素直に「はい」と答えてくれる。

それだけ喜んで貰えると、取ったほうも嬉しくなる。

家に帰ると、玄関の電気や、家の中の電気がついていた。
行く前は確かに消していたのだが。

「ん？」

鍵を開けて、中に入ると、昼間玲奈が履いていた靴があった。
ユウナと思わず顔を見合わせる。

「玲奈かな？」

「玲奈さまでしょうか？」

居間に行くと、ソファーに腰掛け、濡れた髪にタオルをかけて、
パジャマでくつろいでいる玲奈の姿があった。

「あ、おつかえり〜」

呑気に手を振ってくる。

「お前、帰るの明日とか言ってたかったか？」

「うん、そうなんだけどね〜、ちよつと気になる事があつて
「気になること？」

怪訝そうに尋ねると、玲奈がにやつと笑う。

「いやー、万が一、二人つきりにして、ユウナさんが襲われちゃっ
たりしたら大変でしょ？」

「あほか…」

「あはは、冗談冗談。ゆんゆんにそんな甲斐性ないもんね〜」

「お前、日本語の意味分かって使ってないだろ…」

脱力する悠羅を笑いながら、玲奈がユウナに視線を向けた。

「ゆんゆんに変なことされなかった？」

そう尋ねてくる玲奈に、ユウナはくすくすと笑って答える。

「楽しかったですよ」

そう言った、彼女の顔が笑顔だったので、玲奈も安心したように
笑った。

本当は、最初から玲奈に泊まる予定はなかったことを二人は知らない。

「だって、ユウナさんもゆんゆんも、折角一緒に住んでるのにどこか壁があるからさー」

「くすす、玲奈ちゃん、偉い偉い」

そう言っ、事の顛末を聞いた紗枝が玲奈を撫でた。

Act・9 『ある日の光景』

「ねえ、ゆうくと玲奈ちゃんって春からだよね？同居してるの」「長いようで短い昼休み、いつものメンバーで食事中に最初にそんな話題を振ってきたのは歩美だった。

今日は陽がよく出ていて暖かいので、玲奈と歩美と紗絵の三人は屋上で食事をとることにしている。

「ん？そっだよ」入学する一週間くらい前から。それがどうかしたの？？」

対する玲奈はいきなり出た話題に首を傾げる。

「いや、いまさらなだけだし、年ごろの二人をおいていつちゃうご両親もすごいけど、あっさり受け入れた二人もすごいなあって」

まわりに誰もいないのは承知の上だが、歩美は声を潜めて囁いた。「確かに普通はないわよね」

隣で紗絵も頷く。

「うちのお母さん普通じゃないから……」

玲奈が遠い目をしてため息をつく。

「でも、玲奈ちゃん不安じゃなかったの？」

「んー？」

「だって従弟とはいえ同じ年の男の子と同居とか……ずっと会ってなかったんでしょ？」

「あー、うん。……そういえば、あんまりなかったかも」

あはは、と笑う玲奈に歩美は目を瞬かせる。

「玲奈ちゃんって無邪気というか……心配かも……」

呆然と呟く歩美に紗絵は苦笑する。

「玲奈ちゃんはゆうくと小さい頃あった記憶があったんだよね」

紗絵がフオーするが、いくらなんでも幼少の記憶などあてにならないのではないかと歩美は思ったが、それは口には出さなかった。代わりに別の質問をする。

「ぢゃあ小さい頃のゆうくんってどんなだったの？」

なんとなく、興味本位で聞いてみたのだが、玲奈の表情が少し曇ったので、歩美は少し焦った。

「…今とか変わらず可愛かったよ」

ほんの少し、何かを思い出すように大人びた顔をして答える玲奈が印象的で、歩美はそれ以上尋ねることが出来ず、黙った。

そんな空気を壊すように口を開いたのは紗絵だった。

「あゆちゃん、そんなにゆうくんの事気にしちゃって、恋の予感？
いつもの軽い口調。」

「まつさかあ。あたしゆうくんの事はただの友達にしか思っていないもん」

ひらひらと手を振ってきっぱり否定する歩美に、今度は玲奈が瞬いた。

「…そうなの？」

「え？」

「てつきり私、あゆちゃんはゆんゆんのこと好きなんだと…」

「いやいや、玲奈ちゃん、それ怖い誤解だから…」

歩美は心底いやそうな顔をして否定した。

「そう…？」

まだ何となく腑に落ちないという風に玲奈が歩美を見やる。

「うん。私の理想は優しくて大人で背が高くて、そう、ゆうくんとは正反対の人が良い…確かに顔が良いのは認めるけど性格さいあ…ったあ！」

そこまで言い掛けていきなり頭を襲った鈍い痛みには歩美は頭を押さえた。

「げっ…いつのまに…」

「お前、黙って聞いてれば…」

そこに居たのは今話題の悠羅本人だった。隣にはくすくすと笑っている隆志もいる。

「あ、はっ？」

「あはっじゃないだろ」

「お、女の子の話盗み聞きなんてゆうくん悪趣味だよっ!」

「お前、自分のことは棚上げなのな…」

呆れたように横目で睨む悠羅から歩美はすっと目をそらす。

「…俺はまだ成長期なんだ」

「…ゆんゆん、身長気にしてたんだ?」

ぼそつと呟いた一言を玲奈は聞き漏らさなかった。

「う…」

ちなみに悠羅の身長は170センチでそんなに低いわけではなかったが、本人は気にしているらしい。

「ゆーたん、そのままでも可愛いよ?」

「隆志、本気で殴るぞ…」

隆志は絶対零度のほほ笑みを向けられ、口をつぐんだ。

「まあまあ、ところでゆんゆんどしたの?」

埒があかないと間に入っただのは玲奈だった。

「いや、教室で昼摂ろうと思ってたら隆志が来て、天気もいいから屋上で食べるかって話になったんだ。な?」

「そうそう、ゆーたんが二人つきりで食べたいって…」

「言ってない。」

ため息をこぼして悠羅が腰を下ろし、その横に隆志も腰を下ろした。

「結局いつものメンバーね」

紗絵がにこにこ呟いた。

先程の玲奈の言葉でないが、変わったと言われれば、そうかも知れないと悠羅は思う。

昔の自分が見たら驚くくらいには自分は変わっただろう。

こんな風に感情の起伏の激しい一面は、以前の自分にはなかったから。そして、こんな風にまわりに人のいる生活も以前はしてこなかった。

「ゆんゆん? 考え事? はげるよ」

ぼーっと過去の自分を思い出していたらどうやらトリップしていたらしく、玲奈が目の前でひらひらと手を振っていた。

「…玲奈うるさい」

目の前の手を払って横目で睨むが、そんなことは全然気にした様子もなく玲奈は笑っている。

思えば、こんな風に女の子と接することもなかった。

「はは、ゆうたん、女の子はもっと優しく扱ってあげなきゃ」

隆志の軽口に玲奈がうんうんと頷くのを敢えて無視して、そんなやり取りに紗絵も歩美も笑っている。

今は当たり前のような光景も、やり取りも、今の自分も、すべてはあの日ここに來たから、得たもので。

それらすべてのきっかけは、やっぱり隣にいるこいつのお陰なんだろうなと思う。

口には出さないけれど。

Act・10 『不思議な関係』

俺がこの家に世話になり初めて一カ月ちよつと。

今はもう慣れたこの生活も、客觀的に見ればおかしいものだろうと思つのは、俺が現実主義だからなのだろうか。

「ふあゝ…うあ？つてゆんゆんが起きてる…今日は雨…？」

土曜日の朝、天気は五月晴れとどこをどう見ても快晴なのに、そんな失礼なことを言ってきたのは同居人の玲奈だ。

もう11時だというのにまだパジャマ姿で眠そつに目を擦っている。

「ほんと、失礼だよな…」

「日頃の行いでしょ」

「玲奈だつて似たようなもんだろ」

「う…」

なんともない、朝の日常。

ずいぶん前から一緒にいるような錯覚さえ起こしそうな程、俺は今の生活に慣れていた。

「おはようございます、玲奈さま。もうお昼ご飯の時間なので、朝昼一緒によろしいですか？」

丁度良いタイミングでキッチンから顔を覗かせたユウナが玲奈に声を掛ける。

「うん、ありがとう。んじゃ、わたしシャワー浴びて着替えてくるね」

玲奈は頷くと、そういつてぱたと居間を後にした。

大体、休日の朝ご飯はユウナは作ってはいない。

早起した日なんかは、ありあわせのもので軽食を出してくれるが、玲奈も悠羅も大体が起きるのが遅いのでそうすることの方が珍

しい。

もちろん平日は朝から朝食を用意してくれている。

葉月家でメイドとして働いているユウナという人間は、一見きつそうに見えるが、割りと甘い。

こんな時間に起きてても何も言わないし、咎めたりもしない。たぶん、よほど間違ったことをしない限りは見守ってくれているのだろうと思う。

玲奈の母親の玲香がおおらかなせいもあるのだろう。

そんなことをふと考えながら、悠羅はユウナの煎れてくれたブラックコーヒーに口を付けた。

酸味と苦みが口の中に広がる。

豆から挽いているだけあっていつもながらに美味しかった。

「暇ねえ……」

机に突っ伏すようにしてつぶやいたのは玲奈だ。

ユウナさんの作ってくれた昼食を食べ終え、今は13時を回ったところ。

「まあ、確かにな」

何となくテレビのチャンネルを変えながら相づちを打つ。この時間の番組はどこも面白いものはしていない。

「休日の昼間から若い者がだらけた生活……悲しい……」

「言うな、本当に悲しくなるから」

「はあ……」

玲奈は本当に退屈なのだろう、大きく嘆息し、おもむろに今日の新聞についてきた広告を広げた。

ぱらぱらと適当に流し見るようにめくっていたが、途中でその手を止める。

「あ」

「……何？」

何かを見付け、口を開いた玲奈の視線の先を横から覗き込むようにして目でおった。

「今日がオープンだったんだ」

玲奈が機嫌を良くして見ている先にあるは、巨大ショッピングモールのちらしだった。

「なにこれ…人多そうな…」

人込みのあまり好きでない悠羅は嫌そうに表情を歪める。

「そつか、ゆんゆんは知らないよね。ここは去年からたてられてる新しいショッピングモールだよ。映画館やプール、娯楽施設も隣接していてかなり大きいんだって」

どこか、うきうきしたように説明してくる玲奈に嫌な予感を感じながら悠羅は適当に返事を返す。

「オープンしたては人多そうだな…」

「でもわくわくしない？」

「しない」

きっぱりと否定する悠羅に玲奈は頬を膨らした。

「んもー！若い者がそんなんでもうするの！若いときの苦労は買っでもしろっていうでしょ！」

「俺は君子危うきに近寄らずの方が好きだ」

「うう…行こうよ」

すぐるように玲奈は悠羅を見るが、悠羅は視線を合わさないようにすっとそらす。

「ねーねー」

それでも玲奈は負けじと悠羅の服の袖を引いた。

「いやだ…あゆたちと行ってきたら…」

心底嫌そうに悠羅は断るが、それくらいであきらめるような玲奈ではない。

「あゆちゃんも紗絵ちゃんも今日は家の予定があるんだも」

「俺はいやだ」

「どうしても？」

「どうしても。」

「うう…」

放つとけばそのまま続きそうな押し問答だったが、それを制したのは洗い物を終えて顔を見せたユウナだった。

「お二人とも、どうされたんですか？」

「あ、ユウナさん！」

ユウナの登場に真っ先に反応したのは玲奈だった。

「はい？」

名を呼ばれたユウナは、玲奈に近寄ってその手に握っているちらしに目を落とし、何となく今の状況を理解した。

「ユウナさん、今日オープンなの知ってた？」

「はい。朝、見ましたから。CMでも流れてましたし」

「ね、ね、ユウナさんも行きたくない??」

どうやら、玲奈は仲間を作ろうとしているらしい。

「はあ……」

今度はユウナの袖を引っ張りだした玲奈を悠羅はどうせユウナも断るだろうとたかを括り、方肘についてそのやりとりを眺めていた。だが、ユウナの反応は悠羅が予想しているものではなかった。

「そうですね…人は多そうですが興味はあります」

あっさりと肯定の意を見せたユウナに、玲奈は味方を得たと喜び、悠羅は形勢逆転にうなだれる。

「はい、2対1！ゆんゆんの負け！」

うれしそうに言うてくる玲奈に悠羅はそれでも抵抗をみせた。

「嫌だ……」

「なんで！」

「人込み嫌い……」

玲奈と悠羅の押し問答にユウナは顔を曇らせる。

「悠羅さま、すいません…そんなに嫌だとは思いません、私まで行きたいと言ってしまったって……」

「う……」

しゅんと悲しそうに謝るユウナに罪悪感を感じ、悠羅はそれ以上強く言えなくなる。

「あの、ユウナさんが悪いんじゃないよ…」

どうにか否定しようとするが、ユウナの悲しそうな顔はなかなか戻らない。

「……みんなで行こうか……」

とうとう耐え切れず、悠羅が折れることになるのは、最初にユウナを巻き込んだ玲奈の作戦勝ちなのだろう。

隣で喜んでいる玲奈に悠羅は嘆息した。

「わぁ、おっきい」

電車で30分ほどの距離にあるそこは、予想通りに人がごった返していた。

車での電車の人ごみにもうんざりしたが、ここに来て、先ほどの電車の中のほうがまだマシだったと思える。

「…口、開いてるぞ」

悠羅に指摘を受け、玲奈は慌てて口を閉じた。

「そうゆう事は気づいてもいいわなのっ」

「俺が言わなきゃお前、いつまでも口開いたままの間抜け面をさらしてたと思うけど？」

「くっ…」

言い負かされた悔しさで、玲奈は悠羅をねめつけるが、そんなものは受け流してしまう。

ため息を付きつつ、隣を見ると、玲奈ほどでないにしても、感動した面持ちのユウナの姿があった。

悠羅の視線に気づき、慌ててユウナは口の端を結ぶと、今度はすまなそうに悠羅を見た。

「すいません、悠羅様…」

「え？」

「私が無理を言ってしまったって…先ほどから悠羅様、ため息ばかり付かれていますし…」

そういわれて、悠羅は自然にため息を付いてしまっていたことに気づく。

何だかんだといいつつも、来るといったのは自分であるのだし、ため息ばかりついているのは周りのテンションを下げるばかりであるし、失礼だ。

「ううん、人込みが苦手なのは本当だけど、来るって言ったのは俺が決めたことだし。気にしないで。それに、ユウナさんは普段、俺たちの世話ばかりで家にいることのほうが多いんだから、せっかくの機会だし、楽しもう？」

そういうと、ユウナは表情を崩してほんの少し笑顔でこくりと頷いた。

それを機に、三人はモール内へ歩みをすすめはじめた。

「ふふ、ゆんゆんも分かってるじゃん」

隣から玲奈がにこにここちらを見てきた。

「何が？」

言葉の真意がつかめず、少し眉根を寄せて悠羅が質問で返す。

「ん？ユウナさんのこと。ユウナさん、口では言わないけどね、意外とこうゆうところ好きなの。普段は私、紗枝ちゃんたちと約束しちゃうでしょ？そしたらユウナさん、誘っても来てくれないの。それに、ゆんゆんが残るっていったら絶対ユウナさん遠慮して自分も残るっていつちゃってたもん。」

さらっと言われた内容に、悠羅はほんの少し驚いて瞬いた。

「俺、てつきり自分が来ただけだと思ってた……」

「あはは、それももちろんあるよ。」

「いったいどつちなんだと突っ込みたいが、どっちも本当なのだろう。」

現に、本当に来たいのであれば、別に紗枝たちと来ることだって出来ていたのだから。

「……あ、ユウナさん、あそこにパンフレットがあるよ」

そういつて玲奈は、ユウナの腕を引いてサービスセンター前に置かれたパンフレットを取りに行った。

その後姿を見ながら、関係さえ知らなければ、この二人は仲の良い姉妹にも見えるなと思いながら、はぐれないように悠羅も後に続いた。

「ユウナさん、何処行きたい？」

ガイドマップを広げながら、玲奈がユウナに問いかける。

「私はどこでも…」

予想通りの答えに苦笑し、玲奈はガイドマップに目を落とした。

「んーじゃあ、適当に端からショッピングしてデザートでも食べようか」

玲奈の提案に、ユウナは頷いた。

もちろん、悠羅は自分に行きたい場所がある訳ではないので特に依存はない。

玲奈の先導の元、三人は歩き出す。

最近では、ひとつのショッピングに女性ものと男性ものが混在していることはあるし、玲奈たちが女性もののショッピングに入ったときは玲奈がガイドマップを見ながら近くの男性もののショッピングを教えてくださいそこで待っていれば良いから、割と自分も好きなものを見て取れた。

疲れたときは、店を出るたびに増えていく玲奈とユウナの荷物を近くのベンチに腰掛けて見張っていたり。

人は多いが、大きなショッピングモールだけあって、真ん中の通路を広くとっており、悠々と歩けたのが救いだった1。

「うーん、ショッピング数300店舗はざらじゃないね。」

ティーンズ向けのショッピングは制覇した頃、買い物に満足した玲奈は、今度はお茶にしようと、目をつけていたカフェに向かうことにした。

空いている時間帯だったようで、すぐに店員からの案内を受け、席に着くことが出来た。

ユウナの横に玲奈が座り、その前に悠羅が腰を下す。

「まあ、それだけ買えば満足だろ…」

運ばれたお冷を半分ほど飲み乾し、人酔いと疲労からやつと解放された、悠羅は一息ついた。

ちらつと前を見ると、満足そうなユウナと玲奈の顔。

その顔を見て、不思議とたまにはこういうことも悪くないかと思う。

なんだかんだと、この目の前の従姉に懐柔されていつてるのだろう。

「どうしたの？」

「ぼーっと考え事をしながらついつい玲奈をじっと見ていた形になっていたらしい。」

視線に気づいた玲奈が、首をかしげる。

「ユウナさん、私の顔、何かついてる？」

「いいえ、何もついていないと思いますが…」

本当に何もついていないようには見えなかったのでユウナも首を傾げた。

「んー…なんで見てたのー？」

視線を悠羅に戻し、玲奈が再度尋ねる。

「いや、別に、間抜けな顔だなーって思って」

「ひ、ひどいー！ゆんゆんだってしょっちゅうぼーっとしてるじゃん！ー！」

騒ぎ出す玲奈に、それを見て笑う自分、見慣れた光景ゆえに気にすることなくお冷を飲むユウナ。

こんな構図が最近当たり前になってきた。

疎遠だった従姉弟とメイドが親のいな家に同居だなんて中々ないこと。

周りから見たら自分たちはどう見えるのだろうか？誰も自分たちが同居しているだなんて思わないだろう。

一見不思議な関係ではあるけれど、例えば血の繋がりはなくても大切な家族ともいえる存在。

さっきまで怒っていたのに運ばれてきたケーキプレートに目を輝かせる玲奈とユウナ。

そんな二人を眺めながら、柄にもなく、こんな日々が続けばいいのにも思ってしまった。

一番不思議なのは、そう思うようになった自分の変化なのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8646z/>

[連載中]3R

2012年1月5日01時45分発行